泉屋叢考

第四輯

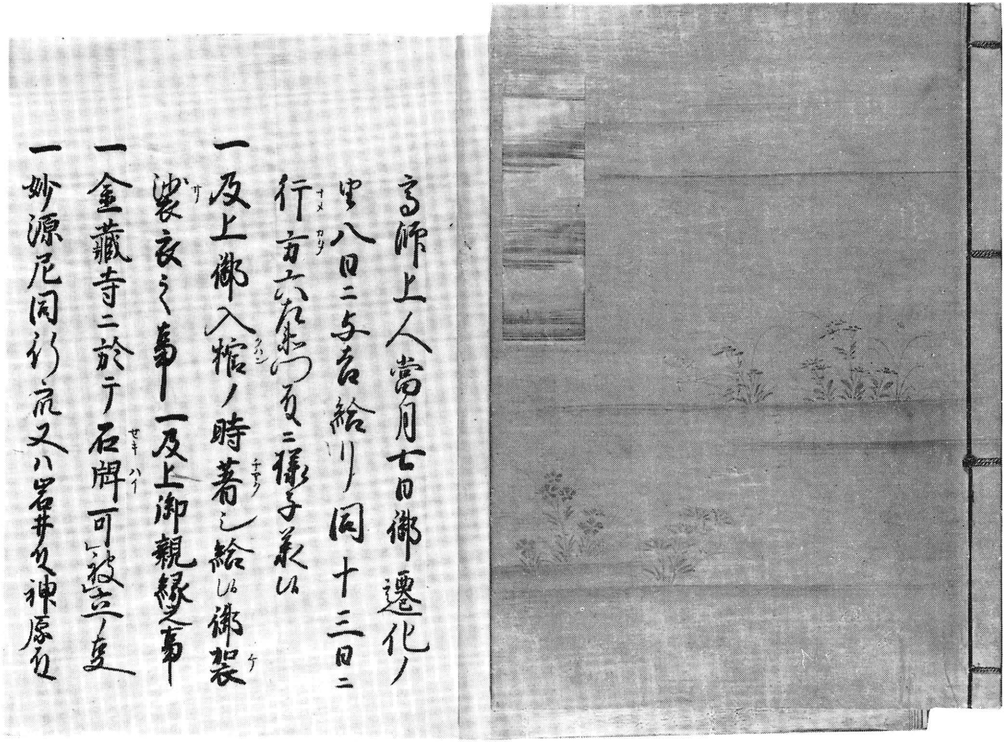
泉屋叢考

第四輯

七

文殊院遺文

下


高師上人當月七日御遷化ノ
由八日ニ承給リ同十三日ニ
行方六[illegible]ニ様子承以
一及上御入棺ノ時着シ給シ御袈
裟衣之事　一及上御親縁之事
一金藏寺ニ於テ石牌可被立ノ事
一妙源尼同行衆又ハ[illegible]神原[illegible]

文殊院遺文集（七冊本）

往生要集巻上　　盡第四門

天台首楞嚴院沙門源信撰

龍谷大學圖書

夫往生極樂之教行濁世末代之目足也道俗貴賤誰不歸者但顯密教法其文非一事理業因其行惟多利智精進之人未爲難如予頑魯之者豈敢矣是故依念佛一門聊集經論要文披之修之易覺易行惣有十門分爲三巻一厭離穢土二欣求淨土三極樂證

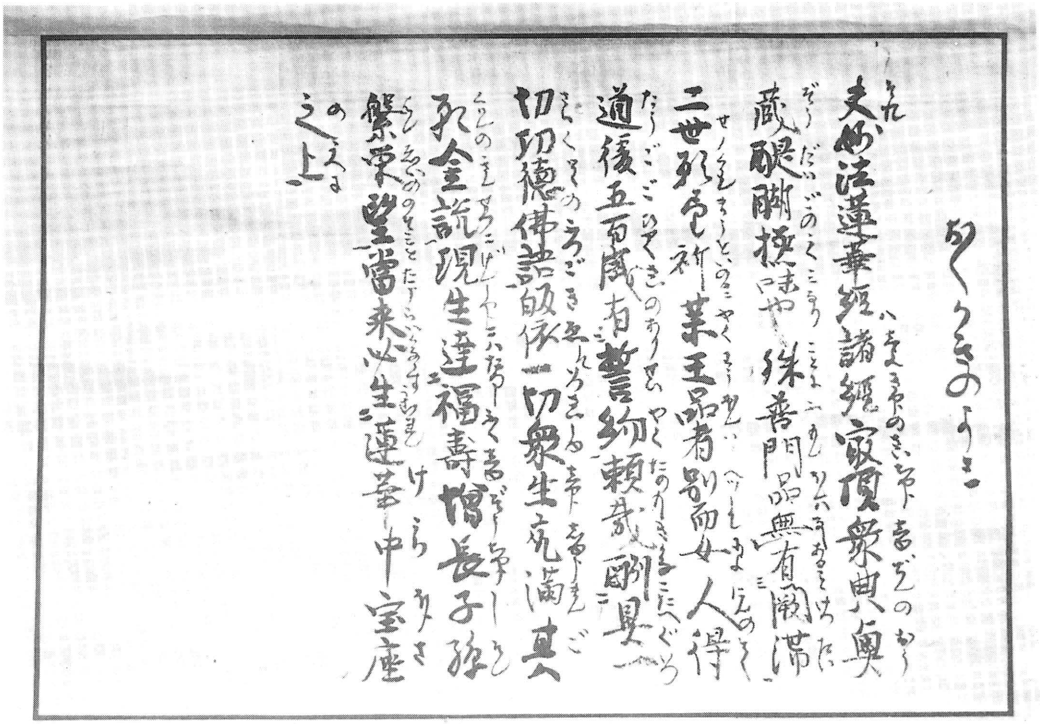
世間流布之本依繁落字謬點令尋求往古楞嚴院點本開板之信師言置之座右備於廢忘可爲證明本而已

旹寛永八年辛未十月日

洛陽五條坊門上柳町書林

貞外沙門嘉休

文殊院開版往生要集　巻首・刊記



夫妙法蓮華經諸經寂頂衆典奥
蔵醍醐極味也殊普門品無有闕滞
二世所求薬王品者聞而女人得
滅後五百歳有誓約頼哉閻浮提
一切功徳佛語皆依一切衆生充満其人
乃金説現生逢福壽増長子孫
繁栄當来必生蓮華中宝座
之上

文殊院筆法華經奥書

文殊院遺文 下 目次

一 解題 …… 一
二 高師帖 …… 一七
三 佛法帖 …… 三三
四 修行帖 …… 五一
五 如來帖 …… 六九
六 尊書帖 …… 九一
七 拾遺 …… 九六

解　題

本輯には、文殊院の遺文中、消息文と法語・和歌の類を收めた。法語をしたゝめた先德の消息文を輯錄することは、法然上人以來屢〻行はれ、文殊院自身法話の中に其等先德の消息文を引用してゐたことでもあるから、寂後その德を慕ふ一族遺弟等によつて同樣な企てが試みられたことは、比較的早かつたのではないかと思はれる。兎も角、三十數通の消息文と、若干の法語、約二十首の和歌、それに遺誡を加へたもので、數冊の遺文集を編輯したと見え、現在住友家と兵庫縣網干町の井上家とに、合せて四種の寫本が見出され、そのうち住友家所藏の最古のものは元祿頃と推定される。ところでこれは箱の墨書によつて其頃の住友家の手代伊兵衞の舊藏本と考へられるから、年代的に少くもこれを降らない住友家自體のものがあるべき筈で、垂裕明鑑に文殊院手記の師空源の著述と其他消息文數卷を合せ菩提寺實相寺に納めた旨の見えるのは、恐らく之に當るものであらう。惜しいことに、過般の戰災に失はれたか、今その所在を明らかにしない。併しこれによつてその編輯の早かつたことを考へる一助ともなるであらう。唯其等の寫本が四冊本貳部五冊本と七冊本各壹部となつてゐて、全體の編纂體裁を異にするばかりでなく、同じ四冊本で

も各冊の內容の編次は區々であり、又書寫の年代もそれぞれ相違してゐるのは、果してどういふ事情によるものであらうか。以上に加へて、四冊本のうち、井上家本は遺誡を含まず、又五冊本は和歌の部に多少の不備があり、この點では井上家本が最も充實して、住友家の他の二本も及ばず、それに和歌の排列順序も、右の住友家の二本以外はそれ〴〵異なつてゐるなどの點や、更に消息文の書寫の形式にも一致を缺くところがあることなどよりすると、或は三四の人により時を異にして別々に編輯され、定本を見ないまゝに轉寫流傳したのではないかとも考へられる。詳しくは尙後考に讓りたい。

さて、此等の遺文は、文殊院が事につけ折にふれて同行衆に書き與へ或は手許に記し留めて置いたものゝ一部で、元和五年(西曆一六一九年)より慶安末年頃(西曆一六五〇年頃)までの後半世約三十年間のものを含み、その中には自然時折の身邊の出來事や胸中の感懷を述べたところも少くない。しかし、何と言つても、涅槃宗最高の先達として同行衆を化導すべき立場にあつただけに、法話的內容が主體をなしてゐるのである。その法話の內容に就いては、第貳輯の「文殊院の研究」殊にその信仰の條に、消息文の章句を多く引用したから、それで自然一應の紹介がなされてゐる譯で、先師の法門が最上乘の法門であること、當代が末法の世に當り、この末法の世に於

ては、法華涅槃の二經を所依として如說に修行すべきこと、現世の無常を深く觀じ、藥王品（やくわうほん）の所說に從つて阿彌陀佛の安樂世界を欣求（ごんぐ）すべきこと、眞實不動の信を獲得（ぎやくとく）し、三世因果の法を辨へて平生の所行を愼しみ、油斷懈怠なく修行に勤むべきこと、諸宗は皆佛說に基くものであるからみだりに他宗を誹謗すべきでないこと、神祇を崇敬すべきこと、大體かうしたことがその主要なものであつた。

併し前には文殊院の信仰並に涅槃宗の敎旨を窺ふといふ立場より引用したもので、更に同行衆に對する法話そのものゝ點より言ふと、又別にいろいろ注目すべきものが少くない。例へば、沙門員外の名で送られた三月二十一日附の萩の庄三郎宛の消息には、禮拜の本尊安置の問題について、「本尊をうやまふ事、繪像木像も文字にかきたるも同義理にて候。三世の諸佛同一體の理なれば、たとひ佛の異名かはると雖、いづれの佛も慈悲の御內證はあひたがはず候に、我宗旨の佛にてなきといふて餘宗の佛をかるしむる人は、こゝろせばき佛法者なるべし。最も安置して朝夕拜（ヲガム）には、面々あがむるところの宗々の佛を安置すべし、たとひ現世の資財はことたらずとも、冬のころもはうすくとも、あがむる宗旨の本尊は其身に相應するほどに安置申すべし。なくてもよしなき道具はこしらへ、無量劫たすかる所の本尊一佛安置なきこそ、佛法不信ともいッつべきか。

法界に向観念する本尊ありといへども、智眼うすき人は見る事あたはず。三毒の煩悩はおぼえずしてつもる。無常は念々にちかづく。妻子をやしなひても死出の山路の手をひかぬことを思案して、一念も飯命の念をはこび給ふ事肝要にて候。臨終になりてくやみたまふな。」と見えるが、これは前輯の遺誡や法傳記の所説と全く同一趣旨で、涅槃宗の包容的な立場から、禮拝の本尊を中心に信仰の在り方を説いた含蓄深い訓諭である。又三月七日附で妙意禪尼に宛てたものに、「佛法ハ平生ノ決定ヲ以テ肝要トス。往生ハ先師上人血脈傳受ノ時定ルナリ。今生ノ執着少モ心ニカケ給フナ。一筋ニ巡次ノ一道ニ歩ヲハコヒ、一字不說ノ所ニ心ヲ納メ給フヘシ。無量億劫ノ本望此時ニ滿足ス。」とあるのは、別に往生は入信の遲速や學智の有無に關せず專ら信心の深淺によることを說いてあるのと共に、とかく疑惑に陷り易い平生の信仰生活につき明確な指示を與へたものとして注目される。其他日常の用意として、善友善知識に親しみ、惡友惡知識に遠ざかり、六齋日に三歸五戒を持し、逆修の善根を積み、亡者の菩提を弔ふべきことを垂示する外、孝道に就いて二種の別あることを說き、今生の衣食住を調備する有漏の孝は輕く、生前には佛法をすゝめ、信心をいさめ、歿後には厚く菩提を弔うて、永生の樂を得しめる無漏の孝こそ大切であると敎へるなど、その法話は色々の方面に亙つてゐて、まことに興味深く、滋味豊かに、注目すべき

ものである。

此等の法話の後には屢〻「是皆佛說師傳の趣也。」とか、或は又「一字一點も私にあらず。うたがはせたまふな。」などゝ附記されてゐる。これはそこに引用された多數の經論諸釋と相對照し、文殊院の敬虔にして眞摯な態度を窺はしめるであらう。實際法話の中には各種の經典や諸宗の先德の著述などが隨時隨所に自由自在に引用されてゐるのであつて、其他佛典以外の書所謂外典類も色々見えてゐる。それに又敍述が平明暢達懇切丁寧で、如何にも讀み易く解し易い。このことは即ち文殊院の深い學識と溫潤な人柄とを示すものと言ひ得よう。尤も、かくは言つても、それ故に其等の法話のすべての內容が必ずしも今日一般にそのまゝの形で悉く無條件に受け容れられるといふ譯ではない。それは各人の信仰や時代の相違などによることであらう。概して言へば、古人は、經典に對しては、之を殆ど絕對視して純眞に奉戴したかのやうであるが、近代人は、經典そのものについても、個々の內容についても、それとは異なつた立場に立つてゐる。從つて、そこには對機說法による方便的說話や比喩乃至象徵的寓話などの點を考慮しつゝも、矢張り大きな時世の變隔の感ぜられるものがある。

次に、此等の遺文には、初めにも一寸觸れたやうに、涅槃宗の歷史と文殊院の生涯の經歷とを

窺ふべきさまざまの資料が見出される。

高師上人當月七日に御遷化の由、八日に與吉給り、同十三日に行方(ナメカタ)六左衛門殿に具に樣子承候。中略 申ても〳〵何樣の御事可有とは努〻(ユメ〳〵)不寄存候に、扨〻何の世に御尊形を拜、御說法の御聲を聽聞可仕哉。唯尋常(ヨノツネ)の御入滅被成候共、などかは御名殘多く(不脫カ)奉惜哉。其上悲哉。衆生の爲末世濁亂の世に御出世あり、此三箇年の御苦勞を存出し候へは、骨肉も碎る樣に悲候。

元和五年八月十六日附の消息に見えるこの悲痛な慟哭の文に始まつて、涅槃宗の開祖空源及意上人の江戸客死と、空禪即ち文殊院の配所佐倉に於ける驚愕悲嘆や江戸並に京都・大阪・堺・播州・紀州等各地の涅槃宗門徒に對する諭告、歸洛後の獨自の立場に據る師法の護持と同行衆との關係、正保四年十月の嵯峨隱棲と草庵の生活、空禪より員外沙門或は沙彌、更に嘉休・臨西への稱號の變遷など、注目すべきものが多い。其等の具體的な內容に就いては、既に第貳輯で觸れたことであるから、今再び繰返す要はないであらう。唯こゝでは消息にあらはれた同行衆との關係について尙少しく檢討する爲、宛名によつて消息文を分類して見ると、京都・大阪・堺・播州・紀州の各地同行衆宛が壹通、江戸同行衆宛が七通、北九州方面同行衆宛と推測されるものが十七通、住友一族宛が二通、其他が五通となつて、このうち江戸關係は寬永七年以前であるのに對し、北

九州と推測される地方關係のものは隱棲頃より以降で、これが全體の半數を占めてゐる。勿論遺文の多少はそのまま直ちに關係の深淺厚薄を示すものではなく、面接容易な近親や近接地域の同行衆の間には消息文は傳はらず、又不慮の災害によつて失はれることもあり、蒐集者やその方法或は時期などによつても異なつた結果を生ずることではあるが、兎に角、この北九州方面と思はれる遠隔地との特別な關係は甚だ興味深いことである。

ところで、歴史的事實と言へば、以上のやうな涅槃宗や文殊院に關するものゝ外、別に當時の一般佛教界の狀況を窺ふべきものゝあるのも見逃せない。例へば、元和六年二月七日附の岩井氏内方宛のものには、「夫佛法修行の身の上において、稀にももつまじきは、利養我慢勝他の惡心、願てもたしなむべきは、正直慈悲柔和の善心なり。あさましき事ながら、在家の人はゆるす所もありぬべし。殊更出家のかたちとして人のゆかめるをもすゝめなをすべき身として、利養をむねとし、我慢をおもてとせんは、くちおしき事にあらずや。近代の智者學匠と聞し人の大かた此まどひにしづみたまふぞ、世のするゑと覺えて、悲しかるべき事とも也。在家の人は色相莊嚴にばかされて是をしらず。眞實無上の善知識とたのみをかくるぞおろかなれ。」と見え、文殊院自身僧侶の立場に在つて、先づ佛道修行者のあるべき姿を說いた後、當時の名僧と言はれる人達が多く

これに背いてゐることを嗟嘆してあるが、殊に六月二十五日附の村上新左衛門宛のものなどには、更に具體的な事實を擧げて、相當痛烈な批判がなされてゐる。

> 何の宗旨にてもあれ、智惠慈悲方便あつて、貧福貴賤を擇まず、衆生を一子のごとく思して、其の根機に應て法を示給師あらば、是を如來と等く皈依して信受せば、必一大事は遂べきなり。然るに、當世の知識上人ときこゆる人々の中に、學問はさらに出離生死の爲にはせずして、渡世の橋と心得、口にて經釋を說とも、心中格別にして、緣を求めて官位を望、門徒に課役を懸、自余の寺より勝れん事を巧み、堂塔建立の勸進袈裟衣佛具諸事の奉加耳に染て喧し。故に出家は乞食無理の所望をするに依て、門徒法を輕ず。釋尊御入滅の時、諸有御弟子に御遺言あり。我滅後におゐて比丘たらんもの莊嚴美々敷寺を好事なかれとこそ說玉ふに、當代の爲體（テイタラク）、奉加不足なれば借金借米にて我劣らじとす。如此利欲を思程に、富貴の旦那をば髭の塵をとり、貧者後生をなげくとも目にもかけず、剰へ血脈の相傳佛像の開帳に價を定、貧者歎けども不叶、若門人に對面の時は如何にも氏高（ダカク）もてなす。かやうの人を、或は先祖より其門徒なんど言て、一大事の後生を賴なば、あやうきことなり。

これは當時の佛教界の實情を直言して餘すところがない。そしてこゝにこそ革新宗派に屬する純

眞な求道者としての文殊院の本領が窺はれるといふものであらう。

なほ約二十首の和歌は信仰に關する折々の感懷を卒直に表現したもので、いづれも素純な風格を有つてゐる。尤も、中には古歌と殆ど變らないものもあるが、これはその述懷に際し日頃愛誦してゐた古歌の形式を借りたのである。純粹な宗教人の常として、文殊院も詩歌の道はこれを世智として左程重んじてはゐなかつたから、特別に學ぶといふやうなことはなかつたらう。唯信仰の立場から、古來の釋教歌やこれに關聯したものに親しみ、これによつて時に自身の感懷を詠じたものであるが、それを通じて内的生活の一端が一層具體的にうかゞはれるのは、まことに喜ばしいことである。

以上の外、本輯には從來の輯錄に洩れ又は除かれたものをも新たに拾遺として收錄した。そのうち一・三・五の外は、すべて直接自筆の原本に據つたものである。

今これに就いて概說すると、一は大阪府下寢屋川市神田の舊家幸寺家に傳はり、現在迄に見出された消息としては最も早く、二十八歳の時に當つてゐる。その內容は、涅槃經第六の文を擧げて、佛の世に出づること難く、人身は得難く、佛に値ひて信を生ずることの亦難きを說示したも

のであるが、就中佛と信とに就いて說くこと懇切で、その頃の文殊院の宗教的活動を窺ふべき好資料である。尙文中に「今ノ代ハ、佛法ノ道理ハ、ワケテ大ナル寺ヲ立、木像ヲスヘ、薄ヲヌリ、エヲカキ、經ノ理ヲシラヌサヘヲカシキニ、アマツサヘフシヲツケ、打ナラシスル。ヲカシキカナ。〳〵。出家サヘカヤウニ迷タレハ、末々ノ凡夫迷モ道理カナ。〳〵。」と見えるのは、當時の佛教界の傾向を語る資料として、前に擧げたところと併せ見るべきものであらう。次に二の空源自筆軸物の添狀は、師に對する年少時の常隨給仕の格別な關係に併せて、門徒岩井善右衞門との懇親を示す興味深い資料で、その軸物には空源の筆で次のやうな和歌が記されてゐる。

生老病死ハ如來ノ金言、今常ニ耳ニフレ眼ニサヘキル。ナンソヲトロカサル。

コノ世ニテクルシミヲシテノチノ世ノ
　　ラクヲウクヘキタネトナスヘシ
ワカ身ニテ行セスハナトノチノヨニ
　　タレカカワリテ苦ヲハウクヘキ

三は兵庫縣網干町の井上家の舊記に見え、右の二と同類のものであるが、その署名の「員外沙門」

と「嘉休」とは、いづれも現在見出される最初のものとして見逃せない。そして四の涅槃經偈文の「涅槃法燈弟子員外沙門」の署名は、涅槃宗の天台宗從屬後に於ける獨自の師法護持の立場を表明したものとして、特に注目すべきものである。

又五は龍谷大學名譽敎授禿氏祐祥博士舊藏、現同大學禿氏文庫架藏の寛永八年版往生要集の刊記で、最近同博士より示敎を蒙つた。これによると、文殊院は從來世間に流布してゐる往生要集に脱字謬點の多いのを慨き、往古の楞嚴院（著者惠心僧都源信の叡山横川の住院）の點本を尋ね求めて之を開版したといふのであつて、半葉八行十七字詰の大版を用ひ、同書完本の版行としては江戸時代初めての企てで、現存する往生要集の版本中返り點と送り假名を附した最初の訓點本であり、爾來天保十年に西敎寺本が出る迄の二百餘年間專ら行はれた所謂留和本（遣宋本に對していふ）版行の端を開いた點に意義が認められよう。そして涅槃宗に淨土敎的色彩が濃く、文殊院自身その遺誡の中に往生要集によつて不淨苦患無常の人道の三相を説いてゐるなどより見て、本書の開版は如何にもその人にふさはしいことゝ言へる。しかも尚このことに關聯して注目すべきは、弘法大師著述の即身成佛義の版本に寛永六年五月上旬員外沙彌嘉久開版のものがあることで、涅槃宗が密敎的要素をも含み、文殊院自身大師を大いに推尊してゐたこと、又文殊院が寛永四年以來「員外沙彌」の號を「員外沙

門」と併用してゐたこと、そして人名に對する音通の借字などは當時は極めて普通に行はれ、嘉久は嘉休の假借として何等不思議でないことなどより、本書の開版者も亦文殊院其人と解してよからうと思はれる。かくて文殊院が僧衣を脫する以前より既に直接書林に關係してゐたことが明らかになつたのは、改めて注目すべきことである。

六は涅槃宗の立場より記された法華經奥書の訓讀書で、女人得道を强調してある點と、その「おくかきのよみ」の七字の題字が春貞尼の筆である點などに、同尼宛のものであることを思はしめると共に、更に進んでその法華經そのものも文殊院の筆ではなかつたかと推測せしめる。これに對し七は箱書により養子良入翁宛であることが知られるもので、良入翁の生活と信仰とを窺ふべき一資料である。八は雙軒庵に安置された釋迦大日觀音の三尊を畫いた小畫幅の裏書で、良入翁の施入の記が見え、文殊院と良入翁二人の關係と信仰とを窺ふべきものであり、九は第貳輯に詳しく解説したやうに、商賣上の心得を懇切に說いたもので、住友家の堅實な家風はこゝに淵源すると考へられ、早くより重んぜられたものであつた。

十は文中に見える孫の年齢より慶安五年のものであることが知られ、示寂の三ヶ月前に當つてゐて、甚だ興味深い内容を有つてゐる。即ち五月十七日に三井寺觀音の開帳に參り、次いで翌十

八日は坂本の日吉神社に詣で、その模様を良入翁夫妻に書き送つたもので、大津では以前良入翁が日吉參拜の時泊つたのと同じ宿に偶然泊り合はせたこと、日吉神社では、宮々を巡拜して、三の宮の拜殿で辨當を開き、それから方々の落書を見てゐるうちに、思ひがけなく正面の西の柱に書きつけられた春貞尼奉納の和歌を發見したこと、それは慈覺大師の七猿の和歌の意に通じたよい作であるから、定めて神意にかなふであらうこと、これを見てまことになつかしく本人に會ふ心地がしたといふやうなことなどが述べられてゐて、まことに情味豊かなものがある。三の宮は社地の西方大比叡の山麓に一きは高く聳立する靈峯八王子山(牛尾山)の頂上に鎭座し、日吉神社の根源地と言はれてゐて、こゝから琵琶湖一帶を見下ろした景色は、その美はしさ言ふばかりなく、文殊院がこの拜殿で辨當を開いたといふのはさこそとうなづかれる。さてその春貞尼の和歌はといふと、昔ながらの拜殿には、柱にも板壁にも一面に墨書の跡が見られるが、修理などの際洗はれて文字の跡幽かとなり、又見出されるものも安政頃より以降のものばかりで、それ以前の古いものは既に悉く失はれ、從てこの和歌も今は痕跡もとゞめてゐない。

最後の八首の和歌は、前輯に紹介した文殊院自筆の國譯假名書遺教經の卷末に書き添へてあるもので、そのうち三・五・八の三首は直接又は間接に古今集や拾遺集の歌に倣ひ、七首目は古歌

をそのまゝ採録したものである。其他の四首についても或はこれに類したものがあるかもしれないが、ともあれ、それらは現世の無常や信仰生活の内面を詠じてあつて、こゝにも文殊院の人柄がよく窺はれるのである。因に七首目の「心だに誠の道にかなひなば」の歌は、人口に膾炙しながら今日なほ作者も出典も不詳とされてゐるやうであるが、これなどは或は今日見出される比較的早いものであらう。

終りに印刷について一言すると、既述のやうに、從來の遺文集が寫本毎に編纂體裁を異にし、且又書名も卷次も未定のまゝになつてゐる關係上、そのいづれを採つて如何なる順序に排列すべきかゞ先づ問題となるのであるが、こゝには姑く編者が通讀と理解に最も便宜と感じた住友家の五冊本を採り、各冊子劈頭の書出しの二文字によつて、それぞれ高師帖・佛法帖・修行帖・如來帖・尊書帖と名附け（但し第三帖はそのまゝでは佛道帖となつて第二帖の佛法帖と紛らはしいのでこれだけは特に次の二文字を採つた）、之を年次の古い消息を含む冊子の順序に從つて右のやうに排列した上、内容に就いては、他の諸本を參照しつゝ、誤謬を正し、不備を補ひ、又師空源の和歌の混入したものや重出のものを削つた。この場合、若し全體を一連の年次順に排列し直すことが出來れば最も適當と思はれるが、年次の推定し得ないものが可成り

にあるので、この企ては斷念する外はなかつた。尤も、拾遺の方は最後の和歌を除き推定の分をも通じてすべて年代順に排列した。

因に、譌體文字を正字に改め、變體假名並に混用の片假名を便宜平假名に直し、句讀點を加へたことは前輯と同様である。返り點・振り假名・濁點は寫本によつて相違があり、共に多くは後人の加筆であるが、多少は原本にも當初からあつたことが考へられる。しかし何處までを原初のものと考定することも困難なので、讀み易いといふ點から、姑く底本とした五冊本のまゝに從ふことゝした。

消息集 附 法語和歌

高師帖

一

高師上人當月七日に御遷化の由、八日に與吉給り、同十三日に行方(ナメカタ)六左衞門殿に具に様子承候。

一及上御入棺の時著し給候御袈裟衣之事。

一及上御親緣の事。

一金藏寺に於て石牌可レ被レ立の事。

一妙源尼同行衆又は岩井殿神原殿作善供養被レ成候事。

一及上滅後に奉行衆被來候事。

一京都へ以飛脚披露の事。

右之段々慥に承候。申ても〳〵、何樣の御事可有とは努々(ユメ〳〵)不寄存候に、扨々何の世に御尊形を拜

御說法の御聲を聽聞可仕哉。唯尋常（ヨノツネ）の御入滅被レ成候共（トモ）、などかは御名殘多く奉（不脱カ）レ惜哉。其上悲哉。衆生の爲末世濁亂の世に御出世あり。此三箇年の御苦勞を存出し候へば、骨肉も碎る樣に悲候。扨々往生申ても不レ苦我々は跡に殘、三界の獨尊と存候御一人は空（ムナシク）本國へ歸らせ給ふも、御道理哉最哉と存候へは、何樣に書申內にも泪にくれて書れ不レ申候。大聖釋尊も狗尸那城純陀か屋敷にて涅槃に入給へ共（トモ）、御墓は靈鷲山に奉レ築。又唯今も不レ計に東（アツマ）の果にて御入滅候共（トモ）、後には王城に御墓を構可レ申候。此度は播州空波坊紀州村田庄助殿肝要の奉事師長不レ淺御事に候。御美敷哉。申ても餘有。又妙源尼公岩井殿神原殿上津屋殿品川與左衞門殿茂右衞門殿淺草瓦屋殿道意老何も三ケ年の間の御奉公後の世の種と彌御悅可レ被レ成。相構て〳〵、授被レ成候一大事猶々不可思儀に可レ被二思召一候。必々信心たぢろかせ給ふな。釋迦如來の御時は人間の定命百歲の御時なり。然に定命迄も御座（マシマサ）ず、七十九歲と申二月十五日の夜半に入滅成給ふ。雖レ然迦葉尊者は佛後四十四年其國に留り、阿難陀は八十一年殘て、御法（ミノリ）を四方（ヨモ）に弘ける。聞所の衆生疑なく信し、勸る羅漢私なければ、皆往生を遂たり。故に佛は涅槃に入給へども、五百年の間は正法の時と言なり。今又及上入滅し給共、臺玉上人御座ば其敎道は絕申間敷候。恨ても餘有は今の世、悲てもつきせぬは及上の御入滅に留たり。悲哉。及上人毒亂邪風の世に生させ給、今又涅槃の大燈正に消なんとす

るとも、二度醍醐の光を北城金光山に可㆑挑。臺玉上人　先師の遺敎少も亂し給はじ。然(シカラ)ば涅槃の敎法などか可㆑不㆑立哉。經文に曰。佛を無上の寳とす。無㆑佛時は菩薩を無上とす。菩薩なき時は聲聞緣覺を無上とす。聲聞緣覺なき時は得定の凡夫を無上とす。譬は眞の金なき時は銀銅等をも寳とする也。及上御座さらん時は臺玉上人授法の大師と可㆓思召㆒。近事を思に、傳敎大師は御年五十六歲にて入滅なりけれとも、慈覺大師智證大師台敎を弘め、終に今の代まて盛なり。源空上人入寂し給ても、聖光善惠安樂坊等皆淨土の敎を弘て、末代に是又繁昌せり。日蓮上人六十一歲にして滅しても、日藏日朗等一乘妙典を諸國に弘、親鸞元皈有ても如信其跡を續。是を以て可㆑知。臺玉上人寳座の塵を拂玉はゞ、行者爭往生を遂さらん。釋迦如來法を說給へば、五天竺の大王多の長者守護し供養して法を立給ふ。傳敎台敎を弘れは、桓武天皇力を合せ、弘法密敎を瑩(ミガケ)ば、嵯峨帝御助成有。源空易(イ)行念佛を興すれは、月輪禪定敬護と成。今又各の力を且は賴候そ。日蓮の曰。正法を持てる智者はあれとも、檀那なければ爭可㆑弘と也。佛法の興廢有(リ)㆓此時(ニ)㆒。京都へ便宜候者臺玉上人樣へ御力を付られ被㆑下候事千萬賴入候。此方よりも如㆑形申上候。以上。

元和五年
八月十六日　　空禪判

空悦法師　神原忠右衛門殿
空波法師　品川與左衛門殿
惣兵衛殿　日本橋助左衛門殿
村田庄介殿　淺草久太夫婦
妙源尼公　紀州茂右衛門殿
岩井善右衛門殿　クスシ道意老
上津猪右衛門殿　通町久右衛門殿

二

空波老横田九良右衛門殿某か配處へ御訪候條一筆令二專達一候。
一及上人八月七日に元皈し給ふ事、定而其地へ風聞可レ有候。何方も愁傷（シウシヤウ）同し事に存候。大聖釋尊跋提の入滅の時諸の弟子御歎今更身の上に至て知れ候。
一先師濁世の住居をあかせ給ひ本土へ歸らせ給ふ事、聞法敎師各々我等の法欲には奉レ悲といへと

も、彼御心を監申せは、御理り哉最哉と存じ候。弘法大師も定れる御臨終を待不レ給、承和二年の春の比高野山にして入定し給ふ事、今以其御心念を存じ候。傳聞往古の開法の高師入滅し給へとも、多聞廣智の弟子等殘て其流不レ絕。悲哉。今　及上人の弟子等皆以淺智短才也。如何として醍醐の樓門を開、有緣の衆生を涅槃の寶座へ引入すへき。歎所は此一事に極りたり。雖レ然ト天竺の大聖は羅睺羅尊者を殘し、迦葉阿難も留りて、其遺法を今の世迄傳來する事不レ絕。又龜氏國の摩睺羅三藏羅什三藏を殘し、其様(タメシ)三國に多けれは不レ及レ申ニ候。經に曰。佛なき時は菩薩を無上とす。菩薩なき時は聲聞緣覺得定の凡夫までを釋迦佛の如く崇敬せよと也。黃金なき時は銀銅鐵を寶とする如也。及上人圓寂の後は臺玉上人是亦授法の師たるへし。釋迦如來靈山法華寶坐之金言跋提涅槃の最上乘虛言なくんば、其跡を弘　及上人爭か虛言し給ふらん。及上人の說敎誠ならは、臺玉などか邪法を勸給はん。佛道修行の功德他の爲にあらす。往生の一道は信心に依べし。信心怠り惡道に墮在し後悔し給ふな。及上人の遷化驚て驚にはあらず。釋迦如來の御時は定命百年也。それを待不レ給七十九歲にて入涅槃し給き。阿難は我と身を割、龍樹は外道に殺され給ふ。雖レ然演說し給ふ事不レ空して、諸宗の高祖として信して皆往生の大事を遂る。相構て〱一大事を忘給ふな。信心怠ずして血脈の道を磨、三寶の大恩を崇可レ給。御法の

言は朽せぬ故に、佛法の言は金言と申候ぞ。具には空波坊九良右衛門殿に申入候。一度々の御見舞殊更毎度の御音信書付之如く上け申候。及上人御座なく候故詮なしと思召間敷候。其功徳は各々の心法に留り候。少しも他に取入有間敷候。次に我等方への御心付是又度々難レ申盡レ存し候。銘々に申度候へ共、如レ心書れ不レ申候。一々不レ申候へども不レ淺心中に存し候。命も存面談仕候者其刻萬端可レ申候。已上。

元和五年八月廿四日　空禪(サクライ)ヨリ

京都同行衆中
大坂同行衆中
播磨同行衆中
堺　同行衆中
紀伊國同行衆中

三

以前空波御越之折節は細々との御文慥に屆(トヾキ)申候。日外も給り候御心の程不淺難レ有存候。然ば上人

空く成せ玉ふに付、各々様の御歎理りと存し候。古もさるためし數多御入候。天竺摩伽陀國の大王阿闍世王と申候。是惡人にて佛法を信し給ふ事を知不レ給。彼后は來世怖しく思召願たく歎給へとも、高も賤も女は三の障とて、さかんなるときは男に從習なれは、彼后空く月日を送り玉ふ。然に釋迦佛は七十九にして御涅槃成せ玉ふ時、耆婆といふ醫師有て阿闍世王を勸入、同く后悅一同に如來の御前に參、禮拜供養し奉れは、其時佛はいろ〳〵の御法を后又は大王に語り玉へば、信心不レ淺して佛法の安心を得たり。其儘如來は涅槃に入せ給ふ。其後彼大王后は如來を拜申度思給ふといへとも、雙林の煙と上り給へば不レ叶。然は如來の御前にて信心發けれは、御涅槃の跡にて羅睺羅迦葉阿難御法を說、心の玉を磨給へは、彼大王后其折召つれ給ふ五十八萬人皆來世の望を遂たるよし、涅槃經二十卷に明に見へて候。然らば今の有樣其元皆々の風情少も相不レ違候。勸むる人名利我慢の心を捨、聞人疑の心なく信し給はゞ、來世は疑有間敷候。上人御臨終の仰言にも、あと三代まては眞の道たえまじきよし仰殘され候。そこもと一味の心深く御座候方々へは、何樣の趣御語り候へ。委は何樣の文には書れ不レ申候。命も候者値申時萬御物語可レ申候。其元にて宜同行中と切々御談合候へ。栴檀の林に入人は自薰く、麻につるゝ蓬は思さるに直やかに成候。委は跡より皆々の中へ可申越候。已上。

八月廿七日　空禪

各々
参

註　本書は元和五年のものである。

四

村田庄助殿中西勘七殿住友長助皈便之條令染筆候。其地御同行中御信心彌增に候よし、庄助殿御語被成承難有次第に存候。定而　先師上人御満足に可₂思召₁候。師上人の御遺言の中にも、如何にもして衆生の信心退轉なく後世の道を求る人を我志に受るとの仰ごとに候き。然間御名日たらん時は彌々一道を磨給ふ事專に候。

一師恩報徳の爲彼寺に於て惣中より石牌造立之由承候。昔より其謂有事に候。涅槃經四十卷の外に後分と申て二卷の經あり。彼經の上卷に、阿難。若見如來舍利。即是見佛。見佛即是見法。見法即是見僧。見僧即是見涅槃。阿難當知。以是因緣。三寶常住。無有變易。能爲衆生。作歸依處。と云云。此文の心は、釋迦如來阿難に告ての玉はく、若如來の舍利を見奉れば即是佛を見奉る。佛を見奉れば即是法を見奉る。法を見奉れば即是僧を見奉る。僧を見れば即是涅槃を

見るならん。阿難當に知べし。是因緣を以三寶は常に住し玉ふ。變易有ことなし。能衆生として皈依をなす處なりとよめり。然は釋迦如來入滅し給へども、三寶は不レ絶常住なり。爭か信し玉はさるべき。信心さへつよくはなどか往生を可レ不レ遂。三寶とは佛法僧なり。皈依とは深く賴尊ことなり。然は大聖釋迦如來涅槃の後も、諸の弟子靈鷲山に御墓を築、供養禮拜し給ふ事、諸經論に數多(アマタ)見(ミヘ)て候。譬ば、佛法の一大事を決得せざる人も、能化知識の遺跡へ參詣し其敎道を望人利益不レ空事、是又一代經に數多あり。先百緣經の說には、釋迦佛在世の時、迦毗羅城に一人の長者有。此長者の婦妻懷妊せり。十月滿て產に至る時一つの肉團を生す。長者不思議に思ひ、急釋迦如來の御所に參し、此由を問奉る。佛答て曰。通力に入て見に、此者能々養育せよとなり。長者是を聞、心大に歡喜して、皈りて其敎のごとくす。角て七日と云に、彼肉團開て中より百人の童子出生す。見に相好嚴(イツクシク)譬へんかたなし。長者夫婦も奇特の思をなし、世以凶の事に思へとも、佛勅之事なれば年月を送り養育せり。彼百人の童子一同に發心して、釋迦佛の御前に參りて法を受、則出家修學す。學問才智他に勝れたり。如レ是の所に一人の比丘佛に奉レ問。此百比丘等何等の善根を昔植、今兄弟と成、皆以相好人に勝れ、法智亦賢善成や。其上一同に佛の弟子となる。一々宿執を聞んと請(コフ)。如來答玉ふ。彼等が因位と云は、昔九十一劫

以前に毗婆尸佛といふ佛出世成。其佛入滅し給ふ時、婆頭彌（ハツミ）と云大王毗婆尸佛の舍利を取、高一由旬の塔を立供養し給ふ。爾時百人の俗人有て、毗婆尸佛の出世の直說を不聞事を悔、責ても結緣と思ひ、彼毗婆尸佛の御墓塔へ參、妓樂を作香華を供養せり。此善根の功德に依て、百人の俗人九十一劫の間惡道に不落、生々世々に同し如く樂の身となり、今又我出世の時弟子と成て得道を成（シャウ）すと也。是を以證し給ふへし。百人の俗は佛後に一度御墓へ參て利益不空。其上佛法の大事を聽聞あり。信心堅固ならばなどか往生を遂さらん。一見卒都婆永離三惡道と云るも此時成へし。尙重而臺玉上人眞實の直道を示し給ふへし。已上。

九月朔日　空禪判

岩井善右衛門殿
品川與左衛門殿
上津伊右衛門殿
紀ノ國茂右衛門殿
淺草久太善男善女
藥師道意老

其外未申通候御同行中へも申度候

註　本書は元和五年のものである。

五

上津伊右殿神原長右殿遠路廣野(クワウヤ)を凌配所(シノギハイショ)御訪(トムラヒ)候條、別而此御衆は　上人御入滅之砌(ミギリ)まで御看病(カンビヤウ)の衆にて候へは、及上之尊面の奉レ拝(タテマツルハイシ)心地仕(コヽチシ)、彌々不淺存候。其元御同行衆中殊更各々肝心の善(セン・ヨキ)因(イン・タネ)に成申候。宿善をそくひらくへき人の爲には、其時節を見て知識これを教給候。年久しく修行被成候人も、昨日今日信心おこり候人も、信心のあさきとふかきによるへく候。はしめよりきゝなれ智恵かしこきやうに見へ候とも、利養名聞勝他の心まじはり候へば、遠劫の少の縁には成候。此度大事は遂がたきと經文にとかれて候。眞實の信心あらば、佛の御最後に希に一度禮し供養したてまつるとも、不可思議の功德になり候。大聖釋迦如來御涅槃に入給ふ時、純陀と申人夫婦ともに信心堅固にして、如來の御別を悲み、純陀か女房男に言やうは、佛の出世に遇たてまつる事は萬劫にも稀なり。如何にもして少の物をも供養したてまつりたきとて、家の內をさがしけるに可レ然物なし。女泪(ナミダ)を流純陀に言やうは、是に粟少あり。是を飯(メシ)に炊(カシキ)釋迦如來に上(アゲ)たてまつらんと

言。男の純陀曰。さやうの物いかで上べき。と言なから、別の物なけれは、夫婦眞實の志にして如來に上たてまつる。釋迦如來夫婦が眞實の志二つなき事をしろしめして、金棺の中より出させたまひ、かの粟の飯を受給ひ、かほとの眞實の志を一人しては受じとおほせありて、人天八萬人に施し給に、足すと云事なし。故に今の代に至て涅槃像に書記にも、純陀粟の飯を捧る所を繪にかけり。涅槃經三十一巻師子吼菩薩品に曰。又阿尼樓駄言。世尊。我憶往昔。以一食施。八萬劫中。不墮三惡。世尊一食之施。尙得是報。何況。純陀信心施。具足成就。檀波羅蜜。と說り。この文のこゝろは。釋迦佛あにるだと云弟子にかたり給く。世尊わがむかしをおもふに、一食のほとこしを以て、八萬劫中三惡道におちず。世尊の一食の施なをこのむくひをうる。いかにいはんや純陀か信心の施は檀波羅蜜を具足成就すとなり。然れは是を以て能々おもひはかり給へし。其上一人眞實の道に入れば、前後七代うかむとも說て候。よき佛法にともなふ人は別而よろこぶへし。天竺の韋提希夫人は我佛法を聞のみならす、五百人のつかひ女まて成佛をすゝめ、阿闍世王夫婦佛法に入ば、數萬人の男女佛法に入れり。痲の中の蓬のごとし。惡人にともなはゞ、今生は人に笑はれ、永劫は無間の底におつべし。一度も眞實の佛法に心を趣手を合たらん功德かつて空かるまし、大乘は謗りたる者さへ功德あり。信ぜはなどかうかまざらん。是如來の金言祖師の遺言

なり。うたがひ給（タマ）ふな。恐惶謹言

九月十四日　　　　空禪判

岩善右衛門殿

同御内方

神長右衛門殿

同御内方

其外御同行衆中

註　本書は元和五年のものである。

六

貴札珍敷令披見候。然ハ御息女孫子打續キ遠行候而御力落之由尤之至ニ存候。書付ノコトク具ニ過去帳ニ着申候。無懈怠廻向可致候。老タルハ殘リ若ハサキタツコト、無常ノ習（ナラヒ）メヅラシカラズトイヘドモ、其身ニトツテハ愁歎（シウタン）カキリナシ。サレバ釋尊モ羅睺羅太子ノワカレヲヲシミ、孔子モ鯉魚ノサキタツ事ヲナゲキ、白樂天ハ枕ニ殘ル藥ヲウラミキ。涅槃經ニ一切衆生ノ

流轉ノ道理ヲトキタマフ文ノ中ニ、人間一人一劫ノ間流轉シテヌギステタル形、毗富羅山ト云大山七ツ、ミタルホドアルヘシ。其間ヲヤニワカレ、子ヲウシナイ、ナクトコロノ泪四大海ノ水ホトアルヘシ。サレトモ佛法ノタメニハ一滴モコボサズ。ト、キタマヘリ。妙樂大師ノ釋ニ曰。一失人身萬劫不復トノタマヘリ。シカレハ歎テモ甲斐ナキ事ヲヒルカヘシテ、偏ニ三寶ニ皈依シ菩提ヲ弔ニハシカジ。廻向薰力ニヨツテ、アルイハ淨土ノ往生、又ハ人界ニカヘリテ佛法ノ緣ニアイ、極樂往生ヲトグベシ。是皆佛說師傳ノ趣也。以上。

一當年ハ　先師三十三年ニ成候。定而其元何モ御心付可申ト存事ニ候。受カタクシテマレニ受タル人身、アイカタクシテタマサカニ得タル正法ナリ。サレトモ光陰ウツリヤスクシテ、無常日々ニセマル。善惡ノ生所ハ今生ノ修行ニ有。善ニハス、ミカタク、惡ニハカタムク事ヤスシ。ヲロカニ月日ヲ送悔給ナ。

古歌ニ

山ノ端ニ影カタムキテクヤシキハ
ムナシクスキシ月日ナリケリ

七月十三日　臨西叟

松嶋吉左衛門殿
廻答

註　本書は慶安四年のものである

七

先師直道法門者
離文字言句
大涅槃經曰
但智文字未達其儀
寛永五年仲春上旬　　員外沙彌

八

正月廿八日之貴墨二月十九日に京着則令披見候。
一御内坐去年九月十三日に御往生、法名妙慶尼、又當月九日に御果候亡者妙清、何も過去帳に着置申候。隨分毎朝(テウ)廻向可仕候。

一、諷誦文之事承候。尤　先師之高恩辱（カタジケナキ）之あまり、御年忌毎に一通之加陀（カダ）文書候而、御影之於尊前讀誦（ドクジユ）仕候。いつれも當座（タウザ）に火に入申候。相殘て一二通も可有か。乍去我等なと書候儀利益も有間布候條、御無用之至に候。併重而便宜に可進候。

一舊冬は我等散々（サン）相煩候而、霜月比には往生申拵候に、何とか致本復仕候。不及申（ニ）候得共、得道之所常に心念にかけたまはすは一大事に候。必々諸宗皆佛説なれは得菩提候。そしりたまふ事なかれ。以上。

十二月九日　臨西叟

後藤市左衞門殿

註　本書は文殊院が隱棲した正保四年のものかと思はれる。臨西の號は隱棲頃よりと考へられるので、以下この號の見えるものは慶安五年の示寂までの前後六年間のものと推定してよいであらう。

佛法帖

一

佛法修行につきて二つのさはりあり。眞實を得ざるときは疑を以て第一のあたとす。法華經には、この經をうたがひやぶるものは則一切の佛のたねをたつものなりとのべ、先師の言には、うたがひは生死のきづな、佛をしばりて地獄にやると擇、法然上人は、生死の家にはうたがひを以て所止とし、涅槃の都には信を以て能入すとあかせり。親鸞其文を受て、正信偈と云本に、還來生死輪轉家決以疑情爲所止としるしをけり。訓してよめば、生死輪轉の家に還來ことは、さだまつてうたがひのこゝろを以て、所にとゞまるとすとなり。たとひ八萬法藏十二部經をきくとも、疑心あらば聞にあらず。調達は六萬藏の經をよみたれども、疑あれば奈落におちたり。うたがひは生々流轉のたねなり。よくつゝしむべし。つぎに佛法の深理を聞受、智識より相承の御血脈をうけたるうへのさはりと云は、懈怠を以てあたとす。釋尊阿闍世王にかたりたまはく。汝と我と九十一劫以前毗婆尸佛の御出世の時、同ことく大乘の心をこし、佛法修行の朋なり。し

かれども汝は懈怠にして修行せざりき。このゆへに今に至まで眞實の往生をとげず。いまにいたりて三界に流轉せり。しかれども出世大乘の御法を耳にふるゝにより、惡道へはおちず、國王大臣長者などにうまれたり。その善縁くちせずして、今我出世にあひて、此度往生をとぐる。とかたりたまひき。阿闍世懈怠によりて九十一劫の流轉せり。其外淨土宗の智識に良忠と申人あり。四種の往生をあかせるうちに、はじめ信じて後にすつる人往生はならずとなり。弘法大師歌にもよみたまへり。

心こまのりえてみれはくせもなし
　　ゆるすたつなにおつるものかな

淨土の三部經のうち、大無量壽經の下巻に、憍慢弊懈怠は以て此法を信することかたしと說、法華五巻提婆品に、吾過去無量劫の中におゐて法華經をもとめしに、をこたりものうきことあることなしと說給。今生一旦の心中のたしなみにて無量劫の樂果を得たまふことをおもひあはせ、三寶の冥加ををろそかにしたまふべからず。夢幻のこの身を養こしらへにだに、朝夕こゝろの油斷はあるまじきに、まして永生の因をうへたまふこと思案あるべし。〳〵。

元和三年二月廿六日

岩善右衛門殿

長右衛門殿

御より衆によみてきけたまふへし。近日播磨へ下申拵に急々に書申候。分見間敷候。以上。

註 元和三年の年紀は恐らく元和六年の誤寫であらう。

二

夫佛法修行の身の上におゐて、稀にももつましきは利養我慢勝他の惡心、願てもたしなむべきは正直慈悲柔和の善心なり。あさましき事ながら、在家の人はゆるす所もありぬへし。殊更出家のかたちとして、人のゆがめるをもすゝめなをすべき身として、利養をむねとし我慢をおもてとせんは、くちおしき事にあらすや。近代の智者學匠と聞し人の、大かた此まどひにしづみたまふぞ、世のすゑと覺へて、悲かるべき事ども也。在家の人は色相莊嚴にばかされて是をしらず、眞實無上の善智識とたのみをかくるぞおろかなれ。昔天笠にて釋迦如來世に在ける時、迦葉尊者の父十種の夢を見給ふ中に、大象ちいさき窓より出て、わづかの尾にかゝりて出離れずと見て、迦葉に是を問給ふ。迦葉尊者又釋迦ほとけに問たてまつる。佛のかたりたまはく。これは末世の

僧法師、佛法修學の功力によつて、出がたき三界六道を出る理をしる事は、大象の窓より出たるがごとし。然れども名利の尾につながれて火宅をはなれがたし。と說をしへたまふ。いにしへも利養をむさぶり他をそねみし比丘もありしなり。同く釋迦佛の御代に質多居士といふ俗あり。智惠人にすぐれ、後世の道大切とせり。故に善法比丘といふ僧を常に我家に請じてこれをうやまふ。有時他國より又智惠ふかき法師の來りけるを、彼居士これを呼て佛法のこまやかなる事を聽聞し、ありがたく思ひ、この僧を殊に崇敬しければ、善法比丘大にこれを嫉み、色々惡口しけり。あまりの事にや。善法いひけるは、扨も結構に供養せられ侍るかな。今日の供養の座敷になき物とては油糟ばかりなり。といひけるに、質多居士智惠深き男なれば、しばしほどをへていひけるは、我すぎにしころ去國にて珍敷鳥を見て侍り。かたちは雞にて鳴聲を聞ば烏なり。不思議におもひ人に問ば、雞に烏の婚て生たる鳥也。名をば烏雞とこそ申さふらひき。しかるに善法比丘の相はありがたくましませども、たゞいまの言は在家よりもをとれり。されば彼烏雞のごとしといひければ、善法恥がましくおもひて立さりぬ。誠に悲きかなや。かくのごとく語侍る我身を始として、後世眞實の志はうすく、夢幻の世界とは知ながら、欲心うちにふくみ、利養を先とし、人をそしり、我をほむる。外には色よき衣裳をかざり、面には桃李のよ

そほひをあらはすとも、さこそこゝろの醜かるらん。佛神三寶の照覽し給ふほどこそはづかしけれ。經文に末代は狗犬の僧尼恒沙のごとくあらんとかせたまふを、日蓮上人是を引て御書にしるしをかれしは、末世の僧比丘は名聞名利に着して、上には袈裟衣をきて、像はほとけに似たれども、内心には邪見の劍を提て、我出入旦那の元へは餘の僧尼をよせじと、無量の讒言を言付、檀那をおしまん事、たとへば犬の人の家に至て物を得て食するが、後に來る犬を見ていがみほへくらいあふがごとし。としるせり。淨土の善導法然おなじく此意を宣たまへり。外には賢善精進の相をあらはすといへども、内には虛假をいだく事蛇蝎のごとし。と釋したまへり。然に釋迦如來佛藏經に說たまはく。大莊嚴佛の滅後に五人の比丘あり。其内一人は正法を行じ人にも勸しかば、億々あまたの衆生この敎によつて佛法の一大事を聞得て大往生を遂たり。殘る四人の僧は心邪にして佛の正意をしらざりしゆへに、命終て無間地獄におち、あをのきにふし、うつぶきにふし、左右にまろび、九百萬歲の間熱鐵のまろかしをのみ、諸有のくるしみを受たり。其四人の僧を賴し檀那六百四萬億人、おなじく四人の師と友に生々世々地獄におち、同じ苦を受。大劫つきては四人の惡人六百四萬億の檀那阿鼻地獄より出て、亦餘の地獄に落。と說たり。是明に如來の金言佛藏經の文をやはらげ書記侍り。努力うたがひあるべからず。譬ば、

龍蛇に綱を付て、其に隨ひ引れて行ば、必海河にゆくべし。猪鹿に引れては、さだめて山へぞ入なん。これをもつてしるべし。善知識の敎に隨へば極樂に往生し、惡友にしたしみては六道に流轉し、生々くるしみを受ん事疑なし。されは涅槃經に云。菩薩は惡象虎狼には恐怖べからず。惡知識には大におそるべし。其故は象虎のために殺されては、肉身を捨る計にて、來世惡道におちず。惡友のために勸られては、永劫三惡道に落。と說たまふ。決定業障經には、二乘の行人と同じ路をも行ざれとしめし、稱讃大乘經には、おなじ流の水をものまざれとをしへ、鴦堀經龍樹の大論天台の釋文なとには、惡癩野干の心には成とも、二乘のこゝろをおこさゞれ、と見へたり。二乘といふは聲聞緣覺とて佛に成がたき僧法師の名也。如此の經釋なれば、たづねてもしたしむべきは善友智識也。恐ても遠ざかるべきはあしき伴なり。經に曰。善智識をば千里の中をたづねよ。惡智識をば千里の內を去べし。となり。來世の事のみにあらず。今生も友に依べし。古人の曰。人は唯賢に馴て賤に觸ことなかれ。花中の鶯舌は花ならずして香し。又いはく。水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の朋に依。とも云り。これをいはんとすれば又人をそしるに似たり。他のこゝろを憚恐ていはざれは佛法の深理を埋。進退惟谷れりといへども、經論釋文は末代の衆生に聞せんために殘したまふ。雖然經典口なければみづから佛法をかたら

ず。木像物をいはざればてづから法門をさづけたまはず。故にかくのごとく書付まいらせさふらふ。あひかまへて〱無常の念々にちかづく事をさとり、眞實の安心をみがきたまへ。情をかけし夫婦の中、あはれみをくはゆる親子兄弟、たくはへをきし財寶、いづれか冥土のたよりとならん。唯朽せぬ友とては、一句なりとも聽聞の功力、一度なりとも三寶禮拜の薫力なり。鳥類蓄類佛法を聞てうかみたる事、經論聖敎のおもて三國ともに是おほし。まして人間の身としていかてかうかまざるべき。唯一心のもちやうによるべし。よく〱思案をめぐらしたまへ。御身女性にて侍る故、よみやすからしめんために、經文をやはらげ書記しまいらせさふらふ。一字一點も私にあらず。うたがはせたまふな。南無三寶南無三寶。

上人の御詠歌

よく聞て我身の命たゝたのめ
もとのこくらくかはりめはなし

元和六庚申年二月七日

岩井殿御内方

いつれもの御中

三

其後者文にても不レ申無音之至に候。先日中橋衆又治兵衛方より其元無事之由申來令喜悅候。たかひに一日も命なからへ候ほと、一大事はうすく煩惱はあつくなり候こそかなしく候へ。眞に念々にちかづく無常の身をもちて、永き世の用心せぬこそをろかにて候へ。たま〱佛法を聞無常をいとふといへとも、萬境にさへられ懈怠におち、放逸無慚の身となり、又無間之炎にこかされんは、口惜次第にあらすや。故に法華涅槃經に、佛の出世にあひ法を聞ても、信持する事を第一の難事と說給へり。誠に大力の矢をはげてうしろより射つくるよりはやき無常は、國王ものかれたまはす。故に涅槃經に、壽命雖無量。要必當有盡。文の心は、命ははかりなしといへとも、要必當につくることあるべし。又曰。人命不停。過於山水。今日雖存。明亦難保。文の訓は、人の命は停す。山水よりもすぎたり。今日存といへとも、明は亦保がたし。又出曜經には、此日已過。命即減少。如小水魚。斯有何樂。文の心は、此日已に過ぬ。命即減少す。小水の魚のことし。斯何の樂あらんとなり。いつれの人か昨日のかほばせを今日までもてる。時日さしうつりかさなりて、耳とをく心ほれ、こしにはあつさの弓をはりては、佛法修行もかなはす。智者は此理をさと

りて、かねて修行をこたらず。愚者はこれをしらすして、欲に迷て三惡に墮在す。いづれの寶をもとめをきてか來世の枷をゆるめ、いかなる眷屬をはごくみをきてかつるきの山路の手を引れんや。唯一句なりとも大乘眞實の法門を聽聞し、一度なりとも三寶に禮拜したてまつり、一紙半文にても慈悲心を施たらんは、ひとり行永き道路の命の友と成、闇穴道のくらきをてらす燈となりなん。大集經の說に、妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者。唯戒及施不放逸。今世後世爲伴侶。この文の心は、つま子めつらしきたから及王の位も、命のをはる時にのそみてはしたかはざるものなり。唯戒行と及布施と放逸あらさるとは今世後世の伴侶となるとの理なり。放逸とは何事につけても我おこる心をやめすにほしきまゝにふるまふをいふなり。放逸の二字を日本にてはほしゐまゝとよめり。とかくに付て、其道みちのかしらたる人にたよりて我心をいためずむば、みな放逸の心になるべし。人の心は水にたとへたり。水は方圓の器にしたかふとは、丸きものに水を入ればまるくなり、四角なるものに入れは水四角になる。人間かくのことくして、あしき友にましはらは自あしくなり、よき友にともなはゝ又善人となるへし。惡は鬼、善は佛、一心は本ひとつなり。涅槃經に、たとへば日輪東にいでたまへばくらきやみはれ、夜になればあきらかなる事うするがごとく、惡にそみぬれば善はうすると說たまへり。かまへて〳〵先師傳授の法門は一代

五時の肝心最上乗の法門也。随分血脈の一道退轉なく、日夜にこれをたつとみ給なは、念するときを往生といひ、わするゝ時を流轉とすべし。古徳の釋に、身口意清淨成時は諸佛出生し、身口意不清淨成時は諸佛去と云り。王皈命轉に　先師の曰（のたまはく）。この心あるときを皈命極樂とこゝろふへし、この心なきときを地獄と心得へし。つねに地獄のわすれの心をひるかへれは心のかへれとをしへたり。とのたまひしなり。あひかまへて〳〵あふことまれにして聞事尚又かたし。此心をふかくたもち給は、三世の諸佛は是を隨喜し、日本國中の神祇は此人を守護し、先師上人はこれをよきしたしき友とおもひ給へし。わするゝ事なかれ。南無三寶。〳〵。

寛永七年
三月廿九日　　　　　　員外沙彌判

淺草の女人に参

四

涅槃經（ねはんきやう）二十八巻に曰。
願作心師不師於心身口意業不與惡交（くわんさしんしふしおしんしんくいごうふよあくけう）

この文の訓は、願は心の師とはなるとも心を師とせざれ。身口意の業惡とまじわらざれと也。しかればたれの人もたとひ不思議の縁によりてよき智識にあひたてまつり、眞實の佛法を領解すといへども、やゝもすれば妻子眷屬欲心煩惱にふけり、又は色相莊嚴に迷、あるひは三界の内の見解におちて、無上の佛法を失。其時心をひるがへし、さてもをろかなる心かな。無量劫に受がたき人身をうけ、永劫に聞がたき佛法の一大事を聽聞して、今一心の迷によりて亦奈落の底に沈まん事は、あさましき事なるべし。とおもひかへして、彼一大事を相續せは、夫こそ心の師となる道理なり。善惡地獄極樂みな一心の持樣によるべし。故に世親菩薩も一心なりとのたまへり。　先師の云。此心あるときを皈命極樂としるべし。此心のわすれのあるときを地獄と心得べし。常に地獄の忘の心をひるかへせは心のかへれとをしへたりと、皈命傳に述たまへり。

古歌に曰

引てはあしき道にも入ぬへし
心の駒にたつなゆるすな

又云

もえいつる瞋恚の焰けしかねて

我とのりゆく火の車哉

涅槃經二十一巻に曰。

若於佛法僧。　供養一香燈。

乃至獻一花。　則生不動國。

この文の訓は、若佛法僧におゐて、一香燈乃至一花を獻ば、則不動の國に生んとなり。然は一體三寶御出世の時に生を受、眞實無上の佛法を心中に納たる人は、往生極樂うたがひなし。たとひ夫ほどにこそなくとも、後生一大事と思、一度なりとも三寶を禮拜し、眞實心にして燈をさゝげ、又は一本の花を手向、或は香氣をそなへたらん人は、不動の國に生れて、長地獄餓鬼蓄生の三悪道をのがるべしとの理なり。彌々三寶を供養禮拜肝要也。

弘法大師の御歌に

三寶をいのらぬ人の行末は
心の鬼か身をせむるなり

涅槃經三十六巻に曰。

雖得解脱離煩惱是人還受惡果報是名暫出還復沒。

此文の訓は、解脱を得と雖、煩惱に雜は、是人還て惡果報を受る。是を暫出還復沒と名となり。この心は、過去生々より佛法の緣をつみきたりて、今一大事の正法を聽聞し、無量劫の罪を滅し、淸淨の解脱を得たりといふとも、惡業煩惱にまじはりて、一大事を懈怠せば、その煩惱に迷されて、六道に流轉していろ〳〵のくるしみを受、うかむ期あるまじきなり。此人は一度はうかみたれどもまたしづむ人なり。佛在世の善星比丘のごとし。よく〳〵をこたりなく信心をみがきたまふべし。それこそ善男子善女人と佛は說たまふなり。煩惱と云は一にあらす。あるときは眼より色形におち、又口より味におち、鼻より善惡の香に迷はされ、心より萬邪にけがれ、惣じて六根より六塵の境に迷て、大智識より示し給ふ解脱の因をうしなふなり。用心すへし。〳〵。

涅槃經二卷に曰。

一切諸世間。　生者皆皈死。　壽命雖無量。
要必當有盡。　夫盛必有衰。　合會有別離。
壯年不久停。　盛色病所侵。　命爲死所呑。
無有法常者。

此文の訓は、一切もろ〳〵の世間に生ある者はみな死に皈し、いのちは無量なりといへども、要必まさに盡事有べし。夫盛なるものも必をとろうることあり。合會ものはわかるゝ事あり。壯なる年も久からず。盛なる色も病に侵され、命は死のために呑るゝ。法として常に有ものなしとなり。しかれは上一人より下萬民まで、のがれがたきは無常のつかひ、久からざるは浮世の榮花、定なきは人間の有様なり。人毎に賢がほにして世路のいとなみをはげみ、妻子を扶持し、其身に衣裳をかざるといふとも、忽に臨終の時節きたらんときは、育をきたる妻子眷屬も何として引留べき。日比の賢顔の計略も無常の使はゆるさず。冥々として黄泉の旅にをもむき、をそろしき阿防羅刹靑黄赤白の鬼神にせめられん時は、今生にたくはへをける財寳は却而枷となり、娑婆にのこれる妻子は、月日かさなればちぎりをあらためて弔はず。唯獨大無間の底にしづみ、永劫くるしみを受時は、千萬後悔するとも叶べからず。智恵ある人は是を辨て、兼て佛法を修行す。愚癡の人は是を分別せずして、俄に驚て臨終に智識をたつね、繪像木佛にとりつく。臨終には愛別離苦と病苦と死苦と來て五體をくるしめ、正念も亂る。何として眞實の佛法を明らむべき。臨終に智識をたづぬるものをは下品下生の十惡五逆の者なりと觀經に說給へり。月庵和尚古人の語を引て曰。渇に望て井をほるにたとへたり。渇と云は水にかはく事なり。

水にかはきて死するものゝ俄に井をほるはをろかなる常の心にあらずや。五體堅固なる時修行して一心をきはむべし。

空也上人の詠歌に

世の中にひとりとゞまる人あらは
もしもわれかと身をやたのまん

涅槃經六巻に曰。

諸比丘佛出世難人身難得値佛生信是事亦難

この文訓は、もろ〳〵の比丘、佛の世に出たまふ事かたし。人の身を得る事かたし。佛に値たてまつりても、信を生す、是事亦かたしとなり。されば此文に三の難事を説給へり。人間の生をうくることかたし。人とうまれたりといふとも、佛の出世にあふことかたし。たとひまれに佛出世の時に生を受、その教を聽聞すといふとも、眞實に信ずる人これまたかたしとなり。法華經に其心を說たまふ文に曰。

法華經一巻に曰。

諸佛興出世。　懸遠値遇難。　正使出于世。

說是法復難。　無量無數劫。　聞是法亦難。
能聽是法者。　斯人亦復難。　譬如優曇華。

此文の訓讀は、諸佛世に興出したまふことはるかにとをし。あひたてまつることかたし。正使世に出たまふとも、是法を說たまふこと復かたし。無量無數劫にも是法を聞ことまたかたし。能是法をきくもの斯人亦復かたし。譬は優曇華の如となり。をろそかに存ずべからざるものなり。

涅槃經三十五卷に曰。

我於處々經中說言一人出世多人利益

この文のよみは、われところ〲の經の中におゐて說ていはく。一人出世して多の人を利益す。とのたまへり。この文のことくならは、過去七佛より以來末代に及まて、智惠と慈悲と方便とこの三を具したる人皆是釋迦彌陀一佛の變化なりとしりて、深うやまひたてまつるべきものなり。是皆經文のごとく書付たり。是をうたかはゞ大聖如來の金言をやぶる人なり。能々思案あるべし。〱。

五

士之四徳

凡具二四徳一称二居士一。

一不レ求二仕官一。　二寡レ欲蘊レ徳。

三居レ財大富。　四守レ道自悟。

意は、不レ求二仕官一と云は、公方へ奉公せずして佛法を願なり。二に欲すくなく徳をつゝむとは、欲心すくなくしてむねのうちに徳をつゝみたるを云。三に財に居して大に富りとは、居財居士と云て、無限にて財寳のある者、大名などの佛法に皈するを云。髪をそらずして俗にて居たる人を居士といふ。居士の居の字は居とよむ。士はおとことよむ。四に守レ道自悟とは、佛法を信して自然とよくさとる事也。謂なき人は居士といふべからす。

六

十八空之事

第一義空　二内空

三外空　四内外空

五　空空
六　大空
七　畢竟空
八　法空
九　有爲空
十　無爲空
十一　無始空
十二　性空
十三　相空
十四　不可得空
十五　有法空
十六　無法空
十七　有法無法空
十八　散空

修行帖

一

佛道修行の趣品々なりといへども、先師上人勸化のをもむきは、かならずしも經論をよみ、文字をかくにもよるべからず。唯心法の源を了、巡次の道を明にして、三寳の大恩をふかく禮し、ふるき罪をばくやみ、あたらしき罪ををかさず、物毎に慈悲の心ふかく、朝夕本來の皈命の念想たえずば、百人は百人千人は千人ながら、皆以極樂の大往生をとぐべし。

一三寳を敬につきて、又品々の子細ありといへども、今は唯一體三寳を念ずべし。大聖在世の時は、如來の命を佛の寳と稱し、御姿を僧の寳と禮し、金口の御說法を法の寳として、一體三寳にてあるなり。次に住持三寳法界三寳想持三寳など、宗旨に依てあつかひありといへども、重て可申也。

一夫我朝は神國たるに依て、諸宗の祖師佛法を弘めんためには、まづ鎭守とて社を立、神の威光をあふぎ、しかうして佛法をほどこしたまふ。天台傳敎大師は山王權現を敬、智證大師は新

羅明神、弘法大師は四所明神、良辨僧正は八幡大菩薩、玄昉僧正は春日明神を崇給。其外いづれも神の威光をはなれて佛法たちかたき故なり。但神におゐて權社實社のへだてあり。權社の靈神は本地涅槃大都の佛菩薩なるが故にふかくあがめ、實社の蛇神は人にたたりをなすものをすかさんがためにあがむる類なり。かやうの神を崇てたよりとなる事あたはずといへども、こまやかにそれをしりわけ給事叶まじければ、いづれの社をもをろそかにしたまはず、必再拜とて神をば二度禮する物にて候。これは本地と垂迹のいはれあるが故なり。必以先師の流をくむやから神祇をおろそかにすべからず。

一本尊をうやまふ事、繪僧(イ像)木僧(イ像)も文字にかきたるも同義理にて候。三世の諸佛同一體の理なれば、たとひ佛の異名かはると雖、いづれの佛も慈悲の御内證はあひたがはず候に、我宗旨の佛にてなきといふて、餘宗の佛をかるしむる人は、こゝろせばき佛法者なるべし。最安置して朝夕拜には、面々あがむるところの宗々の佛を安置すべし。たとひ現世の資材はことたらずとも、冬のころもはうすくとも、あがむる宗旨の本尊は其身に相應するほどに安置申べし。なくてもよしなき道具はこしらへ、無量劫たすかる所の本尊一佛安置なきこそ、佛法不信ともいッつべきか。法界に向觀念する本尊ありといへども、智眼うすき人は見る事あたはず。三毒

の煩惱はおぼえずしてつもる。無常は念々にちかづく。妻子をやしなひても、死出の山路のてをひかぬ事を思案して、一念も皈命の念をはこび給事肝要にて候。臨終になりてくやみたまふな。已上。

三月廿一日　　沙門員外

萩の庄三郎殿

其外同行中

二

鴈札飛來令披覽候。今程金山に御滯留之由尤御仕合と存候。此方相替儀も無之、今日迄は愚拙も堅固に在申候。去とも無常之念々に近付事は何方も同事と存候。御油斷なく佛說を信じたまふべく候。涅槃經第二に、一切諸世間。生者皆皈死。壽命雖無量。要必當有盡。夫盛必有衰。合會有別離。壯年不久停。と云文あり。文の心は一切世間に生ある者は皆死に皈。いのちは無量なりと雖、要必まさに盡てとあるべし。夫盛ものは必衰あり。合會ものは別離あり。壯年も久停ずとなり。無常はめづらしからずといへども、身の上にちかづく事の用意なきはおろか

なるにあらずや。煩惱は門の犬、打（ウテ）どもさらす。菩提は山の鹿、招どもきたらず。隨分罪業煩惱をおそれ、菩提之妙果をもとめ給へし。以上。

九月廿日　臨西

岡吉兵衛殿

貴報

三

岡吉兵衛殿高太郎左衛門殿御上洛に付御懇書具に令拜見候。其地何も御無事之由珍重に存候。不相替御信心堅固に候由生々世々の願望此一事に相叶候。定而佛神三寶別而は　先師も御本意に可被思召候。佛平等說。如一味雨。隨衆生性。所受不同。と法華經三の巻に說たまふときは、先師相傳の所は一味に候へとも、行者の受樣により、往生の得否は有事に候。皆々御相談候て、惡業をおそれ、三寶を敬、巡次之一道を相續專用に候。太良左衛門殿不殘相澄申候。左樣に御心得候て御內談尤に候。恐々不宣。

二月廿七日　員外

深津七兵衛殿
貴答

四

其元御咄之衆候や。日外さふみ與九郎殿夫婦上洛に候而具に申承候。一大事は得候而もけだいの心にひかれ候はゞ、悪業は日夜にかさなり、無常は歩々に近付候。あいかたき佛法にあい候とも、油斷の行者はならくに落候事うたかひ有間敷候。隨分御たしなみ專用に候。

員外

二月廿七日

後藤市左衞門殿
貴答

五

神田惣左衞門殿就御上洛御芳札令披見候。其地各々內外共に不相替堅固に候由珍重に存候。
遠路故存事も筆拋(ナゲウチ)候。以心傳心。以上。

一愚拙義舊冬十月初より都之西嵯峨と申所へ隱居致候。此所者三國無雙之釋迦之靈僧(イ像)在。拙老當年六十四歳に成申候。漸々少無明之眠覺候か。無常時々に近付事を驚、せめて毎日佛前にひざまづき、罪障消滅之禮拜を致、此度之一大事を成就仕候樣にと念願之外無他事候。つら〳〵過去生々の流轉を案するに、此死生彼之斷つくる事なし。若其内人界之生をうけし事もありなん。其時出世の御佛はいづくの國にかまし〳〵けん。又番々出世の佛出給ひける時分、我身はいかなる形を得いかなる地獄にかありけん。かれといひこれといひ出離解脱の縁なかりき。然にうけかたくして人身を受、値がたくして如來の教法にあへり。剩出世の直道に奉遇、無量劫の望今此時に叶へり。涅槃經に曰く。

佛出世難。　人身難得。
値佛生信。　是事亦難。

又法華經に曰く。

諸佛興出世。　懸遠値遇難。　正使出于世。
説是法復難。　無量無數劫。　聞是法亦難。
能聽是法者。　斯人亦復難。

涅槃經の文の心は、佛の世に出たまふこと難、人身を得こと難。佛にあひても信を生ことと是事亦難となり。法華經之文の心は、諸佛世に與出したまふ事懸遠にして、値遇したてまつる事かたし。正使世に出給とも、是法說給事復難。無量無數劫にも是法聞こと亦難。能く是法を聽者斯人亦復難といへり。然にうけがたき人身は受たり。値がたき佛教にもあへり。信をなすこと亦難とのべたまひたる金言肝に銘ぜり。佛法修行には信をもつて能入すといひ、信は道の源功德の母ともいへり。信は寳の山に入手なり。信の手なくしてはいかんして佛法の寳をとらん。されば釋迦大師の御入滅はすでに二千五百九十七年、先師上人の入寂は三十年に及といへども、信心堅固にして如說に修行せば、必往生の素懷をとぐべき事うたがひなし。たとひ千經萬論をよみたりといふとも、眞實の信なきものは無間におつべし。提婆が千經をよみて奈落におち、慈童が一念の信心に依て淨土に生たるよし經論に見へたり。されは無常のはやく我身にせめきたる事は、山の水の谷へ下り、羊の步の死所にちかづくよりはやし。誰の人も或は親子眷屬智音朋友の老若先立を見ても聞ても、ひつしと我身の上とおもふ人なし。かしこがほにして人を謗法を謗。さこそ佛神三寳の愚にも又不便にも照覽したまふらん。惣じて佛法の中に因果の道理善惡ともにのがれざる事を明せり。因はたね果ははたすとよむ。よろづのたねを植て、それ

それの菓をとる心なり。佛道修行の善心の因をうへなば、定て淨土極樂のこのみをとり、惡業煩惱の因をまきては、地獄流轉のこのみをうるなり。自業自得果の道理のがるゝ所なし。具には三世因果經大集經等に見たり。あひかまへて隨分罪惡を恐、一念も善心にもとづきたまふべし。佛法に方便あり。眞實あり。眞實を得ては一句も方便に心をかくべからず。法華經に乃至不受餘經一偈と說たまへり。あひかまへて　及上傳授の法門は小乘大乘を越最上乘の法門也。能々信敬し給べし。南無三寶〳〵。

慶安元年
六月廿八日　　員外臨西

深津七兵衞殿
落合勘左衞門殿

六

萩吉兵衞殿御上洛に付六月二日之尊書同廿一日に令披見候。如來命、久々絕音向御床敷存候所に、御無事之由珍重に存候。愚拙も于今存生には候へ共、殊外老迫致候。來年は　先師上人三

十三回に罷成候。其回忌に奉値事努々不依思候。命日々滅。雖今日存、明亦難保。ともいへり。誰人も期はしりなから、或は妻子を育むとて、名利に走て無常の使枕の元に來る事をしらす。法華經一卷には、佛の世に出給ことは萬劫に一度と說、涅槃經には億々劫にたまさかに出世し給へしとのべ給へり。一劫の久敷つもりを以萬劫億劫おもひやり給へし。さほとまれなる敎法に値なから、今生かりのすまひにほだされ、受たまひたる大乘の法門を空し、珍敷からさる三惡四生に流轉し給ん事、千萬悔かるへし。

一後藤市左衞門殿三年巳前十二月朔日御往生之儀傳々にて度々承、則過去帳にも著置申候。其外息女孫子なとも其通の樣子に候。爲遺言燈明料御書付のことく請取申候。就中　尊師御筆之物其身の御望として首にかけ給候由、當地にも左樣之御衆御座候。跡に殘候へは末代衆生之寶とは乍申、我身に替て存候は菩薩之行願にて候。梵綱經に、たとひ三千界にあたる寶なりとも命には替べからずと說玉へり。市左衞門殿御心中も尤に存候。一心了解之上にはそれにも依間敷なれとも、すこしのとゞこほりもあらん時は、其功力を以て惡道をまぬかるゝ事有。昔天笠に倶博婆羅門と云惡人有。一生の間殺生を業として善事一つもなし。有時頓死す。冥途にて焔王此婆羅門か善惡をたゞすに、善根一つもなく惡業山の如なる故に、無間地獄にやる。然所に地

獄たちまち破(ヤブレ)て清涼の池と成、餘の罪人までうかふ事を得たり。獄卒焔魔帝釋に其因緣を問。帝釋三千世界をたつぬるに、俱博か善根一つもなかりしに、俱博か葬處をみれば、一里計西に隨求多羅尼を書て立たる卒都婆(ソトハ)あり。其文字一字風に吹れて俱博か死骸(シガイ)にかゝれり。其功德によりて地獄をまぬかれたり。殊に名師の明文書寫し玉ふを身にふれんに、いかてか功德なからん。以上。

七月三日　員外叟

松嶋吉左衛門殿

註　本書は慶安三年のものである。

七

神田治左衛門殿就御上洛ニ尊書之通具に令披見候。其御地皆々御無事之由珍重に存候。隨而先日御內儀御親父菩提之儀承候。名日每廻向失念無之候。就中御母儀內々深津七兵衛殿御內談之故御信心之由候得共、遠路修行被成かたきの趣尤に候。則過去帳逆修分に附置申候。出世正法之利益之深き事は、直說を聽聞したる人次第にかたりつたへ五十人に及ばんに、敎化人も利養名聞之心な

く、聞人もうたがひなく深く信しよろこばゞ、利益むなしかるまじきよし、法華經六の卷隨喜功徳品に具に說たまひて候。是を五十展轉の隨喜功德品と申候。隨喜とはしたがいよろこぶとよみ候。御母儀　先師敎化の一道にしたがひよろこび給は、本意を遂たまはん事うたかひあるべからす。其上過去帳に着置候。たのもしく思召御よろこひ候へと傳說可被成候。不宣。

九月廿日　　臨西御判

引頭七左衛門殿
廻答

八

岡吉兵衛殿就御上洛御懇書具に令拜受候。去卯月末に豊前九右衛門殿京上之砌も預御書中ニ候。則御狀添申に付心底不殘物語致則御報申入候。未相届申候由、遠境之由に候條尤と存候。

一表具之物一幅御上せ被成候。いかにも斟酌に存候へとも、御書中に御斷と申、吉兵衛殿懇に被仰候條、不及異義書進候。努々他見被成間敷候。

一愚拙も當年は殊外草臥候て、中々來年　先師之御年忌に奉値事は難叶候。重而御書中給候とて

も、御報なとも仕事成申間敷候。第一心もほれ、眼もかすみ、朝暮之禮拜も不自由之體に候。生死病痛は人間定りの覺悟に候へ共、今更の樣に申事御心中も恥敷候。難受身體を受、殊に不思義の正說を聞事、千萬劫にも大切に候。此上は信行の二つ、別而ハ信の一字に究可申候に、悲哉、不信懈怠にして空く過なば、後悔如何せん。遺教經に、無レ爲空死。後致レ有レ悔。我如二良醫一。知レ病說レ藥。服與レ不レ服。非二醫咎一也。又如二善導一。導二人善道一。聞レ之不レ行。非二導過一也。此文訓は、爲ことなふして空死せば、後に悔ことと有ることを致さん。我は良醫のごとし。病を知て藥を說。服すると服せざるとは醫の咎にあらず。又善導ものゝ人に善道を導くがごとし。之を聞て行ざるは導ものゝ過にはあらざるなり。此遺教經は釋尊入涅槃の砌一切諸弟子に示給御遺言なれば、誰の人もあふひで是を可レ信。爲事なふしてとは、佛法修行をなすことなふして、朝暮世路に走空く死せば、菩提の種なきにより、無間に墮在せん時悔事有を致さん。我とは如來御自身の御ことなり。病をしりてとは一切衆生千差萬別惡業煩惱の病なり。藥は一切の法門其機每に說玉ふ。能聽者は藥をよく吞かことし。疑をなし懈怠にして不信は藥を吞ざるものなり。又今生にてもよき道をしゆるに、うたかひてそのかたへは行す、あしき道にゆくは、導者のとかにはあらす。先師直道を敎給へとも、不信懈怠の人は不レ可二往生一也。是　先

師又は同行の咎（トガ）にはあらす。

一釋迦大聖御入滅は當年寅に至て既に二千五百九十九年にあひ當り候。先師誕生は如來入滅より二千五百十二年目なり。然者後五百歳中と未來記したまへり。此五百年つゝ五つに別（ワクル）時、月藏大集經の趣は、初の五百年は正法堅固と定。ゆへいかんとなれは、如來は御入滅ありといへとも、迦葉阿難等の大弟子相殘て正法を弘通せる故なり。今おもむみれば、先師すでに三十二年に及玉ふ。其正法などか滅すべき。勸化の人名聞利養なく、聞人正信たらは、佛の在世異ことなかるへしか。

七月三日　　員外叟

深津七兵衛殿
貴報

註　本書は慶安三年のものである。

九

岡吉兵衛殿就御上洛ニ尊書忝令拝受候。其元皆々御一味中不相替實道御堅固之由世々の本望不過

之候。有誰人保百年齡。終には芼庭の消露。富貴榮花は唯春夜の夢、昨日も過、今日も過、是何事を待や。難受は人身、移安は月日、難聞は正法なり。然に無量劫より以來今始て値り。隨分心をつくし、念をかけて、往生の一道を不斷に可願。若懈怠にして惡念あらん時節、無常の使門内へ來、兩眼を貫、魂を奪取時は、千萬後悔すとも其甲斐有間敷候。信心堅固にして一大事を遂給へ。以上。

七月三日　員外叟

神田治左衞門殿

貴答

一〇

御母義妙榮尼公御息災之由目出度存候。孝行に二つの孝行候。有漏之孝行無漏之孝行なり。うろのかう／＼はいろ／＼の食物を備、いしやう又は居所を調なとすることに候。是は今生の體有あひだの孝行にてかるく候。又むろのかう／＼と申は、一句成とも佛法をすゝめ、信心をいさめ、往生の後は善根功德をつとめ、弔たてまつる。これはながき世をたのしむる孝行なるゆへに、是

第一也。能々孝行をつくし給ふべく候。ねんころに妙榮尼公へことつて申之由頼存候。御母儀へ別書に御報可申候へ共、同事に頼存候。惣別何之衆にも一人にもあひ不申、狀之取かはしも不仕候得共、遠路思召より被成に付如此に候。皆々其之由頼存候。重而御無用に候。かしく。

二月廿二日　　員外嘉休

神田治左衞門殿

廻答

二

逆修の善根と申は、もろ〳〵の佛のち〳〵の知識もほめをき給ひ候。死て後よき知識をたのみ、さま〴〵のとふらひいたしても、七つにわけてその一分ならでは亡者へはとゞかず。殘る六分はいとなむ施主の功德になると見へて候。せめてそれもとふらふ施主もしんじつそこしんよりとふらひ、出家もいかにも大慈悲のしんをおこし、大乘無上のゑかうありてさへ、七分一とゞくとの事に候に、たぶんの人はよそのきこへ人のおもはくをはぢて佛事供養をなす。又知識上人も大かたは利養のこゝろをさしはさみ、冨貴の檀那の亡者をとふらふにはつとめながく、廻向にねんを

入るていを見せ、ひんじやのそさうなるぶつじをばかるくおもひ、亡者にねんりきもかけず、廻向もそさうならば、かやうのとふらひは七分の一もとゞかずして、かへつてつみともなるべきか。名聞の善根はだいばか五逆をつくりたるよりもなをとれりとかれて候。ふるきうたに

　子ありともうかむ程にはよもとはし
　　いきたるうちにわれをたすけよ

かるがゆへに、ぎやくしゆの善根は七分全得ととかれて候。七分全得と申は、いけるうちにわれといとなむ後生にて候へば、七分ながらまつたくその身の功徳にえて、みじんもむなしくなる事なしといふことはりに候。いづれの僧法師に齋をほどこしても、あさきとふかきとはあるべけれども、いづれもその利益はあるべきに、今度之逆修は諸宗の本師とあがめたてまつり、ことに三國にならびなき釋迦如來へ日々の御膳のくやう、そのたびごとに法施と申て經をよみだらにをみつる功德、いかでかおろそかにあるべき。たとへは金銀米錢しゆ〴〵のたからを大なるくらに日々につめをき、そのみのおやにあづけをくがごとし。しからばそのおやそのたからをたれにかわたさん。そのごとく、釋迦如來へ無量劫のいのちをやしなふたからをあづけをきたまふ。たれにかそのぜんごんをあたへ給ふべき。釋迦如來は一切衆生の慈悲のちゝはゝにてまします。法華經

二のまきに、今此三界。皆是我有。其中衆生。悉是吾子。このもんの心は、いまこの三界はみなこれわがもてり。その中のしゆじやうはこと〴〵くわが子なり。又涅槃經に、視一切衆生。如羅睺羅。この文のこゝろは、一切衆生を見る事らごらのごとくとかせ給ふ。らごら太子と申は釋迦如來の御子にてまします。かやうにじひふかき御佛に善根功德をあづけをき給ふは、たのもしき事にあらずや。そのうへ釋迦如來へ御鉢を一度もさゝぐる功德のふかき事、涅槃經三十一卷に、世尊。我億往昔。以一食施。八萬劫中。不墮三惡。世尊。一食之施。尚得是報。何況。純陀信心施佛。具足成就檀波羅蜜。と宣たまへり。この文の心は、せそん我むかしをおもふに、一食のほどこしをもつて八萬劫中三惡道へおちず。一食の施なをこのむくひをえたり。いかにいはんや純陀信心にして佛に施す。だんはらみつをぐそくしじやうじゆせりとなり。このじゆんだのねはんの砌さゝげたてまつりたるは粟のめしなり。されども純陀眞實信心にあげたてまつるにより、ほとけもよろこびうけさせ給ふ。かやうのきやうもんしやうこしげくしてあくるにいとまあらず。しからばうちつゞきあげたまふ御鉢も、信心に上たまへば、さだめて如來の御內證に叶、功德又經文のごとくなるべし。よろこびたまへ。くちせぬたからこれにすぐべからず候。以上。

五月廿九日　臨西

春貞
まいる

註　元祿十年の春貞尼追善詩歌集によるとこれは慶安三年のものである。

如來帖

一

如來命今生電光朝露と觀念被成候旨殊勝之御紙面に候。涅槃經に、人命不停。過於山水。今日雖存。明亦難保。云何縱心。令住惡法。又出曜經云。此日已過。命即減少。如小水魚。斯何有樂。又云。一切世間生者皆皈死。壽命雖無量。要必有終盡。夫盛有必衰。合會有別離。壯年不久停。盛色病所侵。命爲死所呑。と云云。解脫上人曰。風葉身難保。草露命易消。昇野邊煙。在今乎。有明乎。惠心僧都曰。當知。諸餘苦患。或有免者。無常乃一事。終無避處。誠に光陰早く我身に積事を不辨して、或は己が小智の才覺に慢、或は高位大身富貴の人は下人の崇敬に迷、子孫繁昌の者は是を寵愛するに日を暮し、貧者は又世路を歎て菩提の種を植ず。故に先德云。今此娑婆世界。修道得果甚難。何者。受苦者常憂。受樂者常著。苦云樂云。遠離解脫。若昇若沈。無非輪廻。適雖有發心修行者。亦難成就。煩惱內催。惡緣外牽。と云へり。然に年月身に積死期不知して來。奪精の鬼神枕

の元に來り魂を貫むとする時、斷末魔の苦とて、五體をはなつ苦あつて、病苦死苦愛別離苦一度に身をせめんとき、兼て了得したる法力なきが故に、身より汗を流、手に虚空を握。此時眷屬ともあはれみて、俄に智識を尋、佛像に向せ、かゝまれる手に念珠をかくる。是一つとして何の用にかたゝん。古人云。臨渇堀井奚爲と。愚哉。一失人身萬劫不復。倩人身の難受事を、經論に、大梵天より糸をさけて大海に沈める針の穴を貫、又大地の上に錐を立て虚空より芥子を抛に、其芥子錐のさきにとゝまるより難し。とも宣たまへり。涅槃經に六つの難事を說玉ふにも、第五に人身を受る事かたしとなり。諸經の要文繁してあくるに不遑。されは我六趣四生に流轉せし事を思へは、生を受重に隨て、其生其生の惡業累積して、惡道より惡道にしつむ。法華經に、從冥入冥。如何としてうかむ事を得べき。譬ば大石を山嶽より抛に、其石谷に下て二峯にのほりかたきがことし。然に不思議に此生を受たり。適此生にうかますはいつれの生を待べき。若亦人界に來事有とも、西州北州東州其外佛法流布せさる國に生て何の所詮かあらん。若又佛法流布の國に生ても、出世の智識にあひ奉すば、佛前佛後の衆生と成て、八難の惡趣に墮たる內なり。人界の生を望は、佛法を修行し、三界の火宅を離、本來の淨刹に令到ため也。

一有人云く。二佛の中間にも、人界に生を受なは、諸宗國々に弘り、貴僧高僧家々に有て、鐘大鼓を撞、或は行道を帀、樣々殊勝の品々有。かやうの宗旨に皈依しても助事なかるべきか。それにて成佛得達せは、佛の出世に不遇ともさのみ嗟べからさるに、佛前佛後の衆生は八難の悪趣に入たるものと定給は少心得かたし。如何。答曰。不審の趣尤其謂あり。諸宗何も如來の說敎を以て立られたるなれは、何宗をか撰可レ捨。法門無盡なれは、或は顯密二敎、五時八敎、敎內敎外、三乘四乘、念佛門に聖道淨土、隨自意隨他意、了義不了義、其外種々の法門、家々の立派、不レ可レ勝計。末代の在家人如何として諸法を明め得道する事を得べき。何の宗旨にてもあれ、智惠慈悲方便あつて、貧福貴賤を擇ます、衆生を一子のことく思て、其の根機に應て法を示給師あらば、是を如來と等皈依して信受せは、必一大事は遂べきなり。然に當世の智識上人ときこゆる人々の中に、學問はさらに出離生死の爲にはせずして、渡世の橋と心得、口にて經釋を說とも、心中各別にして、緣を求て官位を望、門徒に課役を懸、自餘の寺より勝れん事を巧、堂塔建立の勸進袈裟衣佛具諸事の奉加耳に染て喧し。故に出家は乞食無理の所望をするに依て門徒法を輕ず。如來在世の時、目連迦葉等廣野城を通せ給ひしに、見人逃去ぬ。佛弟子不審に思、皈て釋尊に問奉る。如來曰。出家は在家人に物を乞なり。こはれしと思て

逃たり。自今已後末代に及まて分にあまる寺舍作へからず。風雨さへのがれば足ぬへし。とて、それより初て坊戒を定たまふ。釋尊御入滅の時、諸有御弟子に御遺言ありしは、我滅後におゐて比丘たらんもの、莊嚴美々敷寺を好事なかれ。文に曰。求寂靜無爲安樂。當離憒閙。獨處閑居靜處。又云。空閑獨處思滅苦本。とこそ遺教經には說玉ふに、當代の爲躰、奉加不足なれば借金借米にて我劣じとす。如此利欲を思程に、富貴の旦那をは髭の塵をとり、貧者後生をなけゝとも目にもかけす。剰血脉の相傳佛像の開帳に價を定、貧者歎けとも不叶。若門人に對面の時は如何にも氏高もてなす。かやうの人を、或は先祖より其門徒なんど言て、一大事の後生を賴なば、あやうきことなり。淨土の祖師云。外には賢善精進の相をあらはすといへども、內には虛假をいたく。譬へは畫瓶に糞泥を入たるがことし。外は淨して內心不淨なり。乞食法師なりとも、說所佛說不違、名利利養の心なきは、則生身の如來なり。此僧は外は不淨にて內心淸淨なり。龍樹菩薩曰。犬の皮の臭袋に金をつゝめるは、袋のくさきによつて金を捨べきや。とのたまへり。心得べし。

一又重而問。さやうに智識に差別ある事智惠なくして見分がたく候。唯智者の種姓のよきを尤と可崇候歟。某の賴候沙門は貧賤孤獨の如何にも下る種姓の人の子にて候が、されとも自心修

行こまやかに、朝暮に罪業を恐、三寶の禮拜懈怠なく、利他の敎化ありがたく候。これを捨種姓よき智識を賴可申か。如何。答。出家に種姓はいらす。天竺より人間の氏四に定たり。一には刹利、これは帝王の御氏也。二には婆羅門、行を淨し道に志、日本にては大方武士の姓也。三には毗舍、是は商賈人の氏也。四には首陀、農人の氏也。日本の四姓は源平藤橘也、右の刹利婆羅門毗舍首陀は天竺の四大河に譬たり。天竺無熱池より四の大河流出たり。東より恒河川、南より信度川、西より縛芻川、北より徙多川なり。此川海に流入さる間は川の名あり。大海に流入ては一味の潮となつて川の名なし。そのことく俗人にて其家々にあるときは氏族の高下あり。髮を剃衣を着すれば、釋子釋氏とて何も釋尊の氏になりては、是は誰の子何の子孫と云事、出家の上には且て入されとも、末世の悲さは道理に迷い、後世菩提心も闇なり。阿含經に曰く。佛告比丘。四大河水入海。無復本名。同名爲海。四姓之子。於佛出家。剃除鬚髮。著三法衣。無復本姓。但云沙門釋子。沙彌塞律云。汝等比丘。雜類出家。皆捨本姓。同稱釋子。法華經に、悉捨王位。亦隨出家。發大乘意。云云。釋尊既に大國の王位を捨、佛法弘通し、乞食頭陀の行を本意とし玉ひしに、當代さもなき種姓を佛法の嚴とし玉ふは、右の經文とは如何。憚を存て白は不申。凡夫善惡を不分、愚痴に迷ひ、亦不珍三途に沈なん。涅槃經

に曰く。譬如下枷レ犬。繫二之於柱一。終日繞レ柱。不レ能レ得レ離。一切凡夫。亦復如レ是。被下無明以レ枷繫中生死柱上。繞二二十五有一。不レ能レ得レ離。悲哉。

一又問。儒者の申されしは、釋尊の説敎も信用にたらすとて、因果の道理をも撥無せられ候。其上儒道は釋敎より以前に弘まりたるやうに申され候。其謂ある事にて候や。答て曰く。儒者も法者も人に依へし。其方のあひ給し儒者は儒の根本をしらさる人なるへし。外典に五常といへるは、内典に五戒と沙汰いたし候。佛法は天竺にて過去七佛より傳來して、釋尊は周の昭王廿六年甲寅に當て四月八日に中天竺に降誕し玉ひ、五十年説法演説したまふ中に、清淨法行經に、儒童迦葉定光の三菩薩孔子老子顏回と漢土に生て、先外典を以て人の荒き心を和げ、後に佛法を流傳せよとなり。果して佛滅後三百九十九年後庚戌十一月四日に孔子出生あつて、外典を大に弘、七十三歳にして壬戌四月八日に卒し玉ふ。顏回は孔子より三十一年後に庚辰に生、三十一歳にして、孔子に十一年先立て、庚戌の年逝去せり。漢土は人の心暴か故に、佛法を信受させんために、儒を先へ始給ふといへとも、天竺にして佛法は事久しと知へし。釋尊一代五時の説敎におゐて、十界の善惡の因果を明、殊に滅後末代の事を示給ふに、一つとしてたかふところなし。佛法甚深成事筆端に盡凡慮の及處にあらされば今閣筆。

一又問。釋尊末代の事を示給に少もたかふことなしと承につき存出す事の候。去所にて大集經を聽聞いたし候に、如來入滅の後を五百年つゝ五つに別給ひ、第五番の五百年は鬪諍堅固白法隱滯と定給候は、國々にたゝかひあらそひのをこる時節にて候や。答て曰く。佛の說玉ふは凡夫俗人の事にはあらす。末代今の世の出家の心を注置給へり。二千五百年後の沙門は形は菩薩に似て心は夜叉の如し。若慈悲心智惠ありて善法を說衆生引攝の僧あれば、仇を結、いかにもして此僧を殺害追放し流罪にもをこなはんと巧、我力に及されば、緣を賴、所の守護へ訴、我心にも惡心と思へとも、利養の心つよく、明け暮れたゝかひあらそふ心を沙門の持、淺間敷次第と定給ふ也。

一又問。世間の體を見候に、尤其義佛說に不違と見へ候。但白法隱滯とはあきらかなる法はかくれとゞこほると候は、如何樣白法は今の世にもあれともかくれとゝこほると候。是も佛說ちがひなく候はゝ、其白法はいづくにかくれとゝこほりて候や。後世は一大事に存候間尋度候。御指南候へと問。答て曰。法華經には、在家出家の中にゐて後末世に法華經を說人あらんと候。定て其人は佛の再誕にて可有なれば、我もいつくに御坐をも不知。能々尋給へと言て立去。

六月廿五日　臨西

村上新左衞門殿

二

涅槃經に曰。人の命の停さる事は山の水の谷にくたるよりはやしと說給ふ。三界第一の釋尊、五逆の提婆、十善の帝王、天下の御あるし、下はしつのめ山かつ、空をかけるつはさ、地をはしるけたもの、いつれ無常をのかれんや。然に佛法をも聞す、心地修行もせすして空死せは、三塗八難の惡趣に墮して、無量劫の苦に沈なは、千萬悔悲しむとも其かひあるましきに、過去の宿緣のなせる故に、釋尊一代の眼目法華涅槃之深理出世の直道にあひたてまつり、此度極樂世界寶座之上に至らん事は、歡の中の喜なり。三世十方の諸佛もあはれみをたれ、我等が信心を守給へ。南無三寶〳〵。

極樂は日毎にちかくなりにけり
あはれうれしき老のくれかな

三

示妙意禪尼

佛法ハ平生ノ決定ヲ以テ肝要トス。往生ハ　先師上人血脈傳受ノ時定ルナリ。今生ノ執著少モ心ニカケ給ナ。一筋ニ巡次ノ一道ニ歩ヲハコビ、一字不說ノ所ニ心ヲ納メ給ベシ。無量億劫ノ本望此時ニ滿足ス。アイカマヘテヲコタリ給ナ。

三月七日　　嘉休

四

上人の御詠歌

あつさ弓ひと矢引射此筈の
　　ちがはてあたるさきの極樂

伊勢物語に

佛敎に愚成ものゝ事を說給文多候へは不及申。

終に行道とはかねて聞しかと
　　きのふけふとはおもはさりしを

と業平ほとの人たに無常には驚給なる。扨又沙石なとにも、臨終は幾度も習度事と候間、頓而獨行なんならしにと存候へは、周榮同道被成度由に候。寒天いかゝと氣遣に存事に候。

後の世の首途ならしの旅の道
　　ほとなくたゝん道とおもへは

嘉休

泉八兵衛殿
　　忠

五

難打置重而令染筆候。無常日日に責來事、扨も可驚事に候條、光陰は矢のことく身につもりても、信心を改事もなく、此度もれなは、又いつの世をか待や。解脱上人の云。釋尊は鷲峯山の暮の嵐となりたまひ、慈尊の月は未出玉はず。佛前佛後の中間に生たる事、悲の中の悲なり。苦海に沈ことを思へは、恨の中のうらみなり。然所に今おもはざるに寳の山に入事を得たり。

若此度信心の手なくは、寳をとらすして空く歸りなん。昨日より今日ははや三途の古里ちかし。巡次の一道專に塵を拂、頓速に一大事を遂可給者也。

一いつくにありても一心肝要と存候。當所も佛跡名所さまぐ面白さふに存引籠候が、心中納さまらずして都と同前に候。無念之至に候。古き草子を見候に我等之心中其まゝに候。

しつかなる深山の奥もなかりけり
　元の心をつれて行には

身をかくす栖をことに尋れは
　心の奥に山はありけり

重而申。佛法世法に付て可心得事、物ことあらそふ事なかれと云。

世は廣し時に依てや替らん
　我しる計あると思ふな

佛前佛後の心

とくはとくをそくはしばしやすらはて
　かゝるうき世に生れあふかな

又唯今のすまゐは
　山里は物のさひしき事そある
　　世のうきよりはすみよかりけり
異國の御おさへの爲守護其元に御座之由、御太義と申なから、忝も日本の御守に候。彌々專用と存候。將又貴殿御心中へも、六根より六塵さはりをなすへく候。無御油斷御用心候て、法身の主人公安穩に賓座にをさまりたまふやうに守護可有候形見なり。以上。

七月三日　　臨西

深津七兵衞殿

註　本書は慶安三年前後のものと思はれる。

六

我孫子助兵衞殿にて

後の世を神や佛にわひ事の、文字をくたけは慈悲の道、我孫子とやよむならん。實や佛の御法にも、皆是我子とは說給ふ。御法の道を願ずは、後の闇路はくらからん〳〵。

七

多左衞門殿へ（この詞書は井上家本にのみあり）

人をだにいさむへき身のおこたるはことわりしれるかひやなからん

老の身はのかれぬ道の有物を定めなき世とたれかいひけん

うちさそふ鐘のひゞきにおとろかぬ我心こそつれなかりけり

吹風にふるゝ有情も草木も皆成佛の縁にしあらばや

比叡山天台の下派に三明院御成の時に（この詞書は井上家本にのみあり）

金光の山のひかりをけしはてゝひゑの山邊の下くさをかる

きのふまてねはんの水をほとこしてけふはよかはの谷水をくむ

あはれともさそやちしきのおほすらんやみぢにまよふ後の衆生を

すゑの世にひらかん法の門をとぢてよわたり衣かくるはかなさ

わするなよ我もわすれし法の師のすくにをしへし後の世の道

一　市人はなにをあてにかたちぬらんようもかなへすかへるかなしさ

二　にこれきてすむ事まれのうき世にてすゝきてくるゝ人そまれなる

三　さんほうのをんをわすれてよくせんとねかふこゝろそほうのぬす人

なかき世のくるしきことをおもひやれはあるにもあらぬこの世なりけり

さきのよにまきたるたねのかひなくてみの成はてはいかゝあるらん

あさましやけふや／＼とおもへともりんゑのきつなきりそかねぬる

かみほとけあわれとおもふ心そへてのちのようかむみになしてたへ

ついの道におもむくまてはおこたりのなきみなれやとねかふあさゆふ

後ノ世ノ苦シキコトヲオモフニハツトムルノリモ物ウカラズヤ

世ノ中ノ罪ノタエマニシノキキテ御法ノ種ヲ蒔ヤヤマトチ

珍敷住ナス嵯峨ノ庵ニモ心留レハ憂世トソナル

世ノ憂ニカヘタルサカノ庵ナレハトハヌソ人ノナサケナリケル

○井上家本では、「吹風に」と「珍敷」の二首の和歌のところは次のやうな書式になつてゐて、雙軒庵の風情を偲ぶに好箇のよすがとなる。

嵯峨雙軒庵風鈴ニ

隨求陀羅尼　吹風ニ觸ル有情モ草木モ

尊勝陀羅尼　皆成佛ノ緣ニシアラハヤ

寶筐印陀羅尼　珍敷住ナス嵯峨ノ庵ニモ

妙法蓮華經　心留レハ憂世トソナル

同　風鈴ニ

於此命終即往安樂世界阿彌陀佛大

吹風ニ觸ル有情モ草木モ

寶筐印陀羅尼

皆成佛ノ緣ニシアラハヤ

菩薩衆圍遶住處生蓮華中寶座之上

八

九右衛門殿三月三日之様子承驚入候。定業必死と乍申不便之仕合、御一門之御心中令推察候。然所に修因感果之道理にまかせ、悪人の一類許たまふ段々、五兵衛殿物語にて具に承感入候。尤因果之道理は三世了達の佛三明六通の導師も遁させ給事なし。釋尊御在世の時、吠瑠璃太子釋迦如來の御一類五百人を籠舎させ、既に殺害せんとし玉ふ所に、目連尊者佛に申て言。如來は三界の獨尊慈悲の最頂なり。假令他屬なりとも助たまふべし。況や釋種なり。いかなる神通方便にても御たすけあれかし。佛ゆるしたまはゞ我神通を以てたすけ見と申時に、如來勅て曰。汝が通力にても叶はず。因果の道理あり。然者その疑をはらさんためなりとて、五百人の內一人とらせ玉ひ、御鉢の中に入、天井にかくしをき玉ふに、四百九十九人誅せられし時、御鉢の中にして自死せり。釋尊其因緣を說玉ふ。彼瑠璃太子は昔海中に住摩訶魚と云大なる魚なり。しかるを五百人の網引引揚ころせり。佛法の緣有て大魚も網引も人間に生を受たり。彼大魚引上し時、我因位童子たりしとき、草の葉を以て大魚の頭をうちしが、其因果酬て頭甚痛そ。とのたまへり。されば天上天下唯我獨尊の御身の上にも因果はのかれ不給なり。

一波羅奈國に貴沙門ありき。時の帝佛法傳受の爲に彼僧を鳳闕に召。傳奏沙門參内の由を奏す。折節帝碁をうたせたまひしに、碁の手に先截と仰られければ、傳奏聞誤て、沙門を截との勅定と心得て、禁門の外へ出、沙門の首を切けり。其後帝彼沙門を召。勅定故首を刎けると奏。帝大に逆鱗ありて、死罪に行事定て後三度奏する大法なるに、一言の下にて誤り、朕が不德をあらはす事、甚大逆の臣下なり。と御歎のあまり、阿羅漢に問玉ふ。羅漢則七日の間入定し、宿命通を得て彼僧の過去現在を見たまふに、此沙門の前生は耕作をする田夫なり。帝の前生は水に栖蛙にてありしに、春の荒小田を耕ける時、誤て鋤のさきにてころすべきともおもはず蛙の首を切たり。しかるに田夫は沙門と生れ、蛙は波羅奈國の大王と生て、ころすべきともおもはずして沙門の首をきり玉へり。因果遁さること經論釋文にのするところ不可勝計。殊には三世善惡因果經に詳に見たり。因果といひて惡事のあしくむくふ而已にあらず、善因善果惡因惡果とて、善惡ともに三世に及て遁事なし。しかるを、善因よく報て或は富貴高位大名或は無上の法門にあひなとするを果報といへり。因果も果報も義理は一つなるべし。されば前生の因今生にて酬は巡先業と云、今生にてなすところの善惡の因そのまゝ今生にて酬を巡前業と云。又今生にての因來生にて報を巡後業と申なり。故に少成とも慈悲善根功德の因を植、惡因

を恐へきなり。されば　先師も舊業をおそれ、新業を作ことなかれ。初て今惡の因を植ことなかれ。とおほせられたり。涅槃經に、諸惡莫作。諸善奉行。と云云。文の心は、もろ〳〵の惡をつくることなかれ。諸の善を行たてまつれとなり。

一六齋日に三飯五戒を持事不審し玉ふに依、大海の一滴を注し候。涅槃經梵網經には殊に戒躰を具に示給。又六齋精進經あり。凡夫智惠あさく、日夜に惡を作て、來生の枷(クビカセ)と成事をわきまへず。寶積經に曰。種々の惡業を以て財寶を求妻子を養育し、これをたのしみよろこひと思とも、命終時苦(クルシミ)身を逼(セム)るに、妻子(サイシ)あひすくふことなし。彼三塗のおそろしきところにて、苦來て前後にかごむ。たくはへをける財寶はあとの眷屬わけとれとも、冥途の苦をは一分も分てたすくるものなし。濁世の凡夫は妻子財寶をすて不斷に禁戒を持事なりかたければ、せめて六齋日は三世の諸佛善惡をたゞし玉ふ日なれば、身心清淨にして一大事の安心をたもつべきためなり。戒を持ばかりにて往生とくるにはあらす。一旦安心を決定するといふとも、自恣に惡業をつくらば、信はすくなく惡はおほし。水よく火をけすといへとも、大火けしがたし。火の中に花ひらかず。過去の宿緣つよく信心堅固なる行者は、妻子に交(マジハル)といふとも、一心清淨ならば、蓮華の泥土にそまず、金の涅(クリ)にそまざるかことし。されども煩惱は過去生々に馴(ナレ)たり。佛法は

無量劫より以來始てあひたてまつる。やゝもすれば惡見におつ。まつ一日六時の內信心はいくときばかりかある。其外はみな惡業なり。煩惱は門の犬、過去よりかいなれて、うてともさらず。菩提は山の鹿(カセギ)、まねけどもきたらず。菩提と云は佛道の事なり。遺敎經に曰。汝等但當ニ勤而行ヲ之。若ハ於ニ山間。若ハ空澤ノ中ニ。若ハ在テ樹下閑處靜室ニ。念シテ所受ノ法ヲ。勿レ令ルコト忘失セ。文の心は、信心は惡業にとらるゝ間、あるひは山の間、もしは澤のあたり、もしは樹の下、ところにはよるまじ。しづかなるところにて、心をすまして、受たるところの法を念して、わすれうしなはざれとなり。但樹下石上のすまゐをし、五戒十善をたもつとも、所受の法なくは道得なりがたし。

問曰。六齋日とかぎる事はいづれの經文に依ぞや。答。あまたの經文に說玉ふといへとも、四天王經殊には六齋精進經の說に依也。聖德太子右之經文に依て、一年の內正五九月を月奏と云、二季の彼岸を年奏と云、六齋日を日奏と云て、隨分に善根をつとむる時なり。又三齋日十齋日と云事もあり。まつ六齋日は、白月三日は八日十四日十五日、黑月三日は廿三日廿九日晦日なり。小月は十八日を加なり。右の日三寶へ皈依し、よく〳〵信心を致へきなり。具にはしるしがたし。以上。

五戒とは殺生・偷盜・邪婬・妄語・飮酒。三皈とは佛寶・法寶・僧寶此三寶へ皈依するなり。

聖德太子日本に初て六齋の市を立給も子細有事に候。

五月十一日　員外臨西

松嶋吉左衛門殿

九

其後は久布不能面謁御床敷存候。未快氣之由笑止千萬に存事に候。しかしなから、生老病死は如來之金言、今更驚事にはあらす候。爲其平生に一大事決定の上は、信心つよくおほしめし候事は、左樣の時分に候。凡夫之習は不叶事に心をとめ候事、是を愚痴と申て、佛いましめおかせ給ひ候。不及申候へ共、現在之執心をきり、於此命終之志ふかくは、誠に佛弟子の本意、經に善男子と說、又は則我善親友とのへたまふなるへし。躰により與風御見廻可申候。以上。

三月十四日　員外判

尙以先師相傳之事、彌以念々相續あらは、念々皆以往生たるへし。以上。

幻栖老
信窓下

一〇

岡吉兵衛殿就御上洛、其元皆々御無事之由承、珍重に存事に候。上方何も替義無之候。唯おほえすしてうつりやすきは月日、拂ともつもるは煩惱の塵、願てもすゝまざるは菩提の道なり。故に煩惱の門之犬は打ども去ず、菩提は山の鹿招とも來すといへり。菩提とは道と云義なり。道心とも菩提心とも後生の道に心をそむるを云。その後生の心は山にすむかのしゝのごとく、まねきよすれどもそのまゝにけさるなり。惡業煩惱はかいつけたる犬のごとし。うてどもさらず。惡心ははらひのけてもたちまちきたるなり。能々用心可有候。もはや其元へ書中に而も申も多分當年はかりと存候。人間有爲の境界は初て可驚にはあらず。唯一心に皈命に心を入しめ給へ。以上。

七月三日　員外叟

妙林尼

勘左衞門殿

久右衞門殿

註　本書は慶安三四年頃のものであらう。

尊書帖

一

尊書珍敷拜受喜悅之至に存候。先其地同行衆中御無事に彌信心堅固に候之由、自身得道の因と申、又者　師恩報徳(ホウトク)彼是殊勝之至に存候。此方相替儀無之候。先師之敎化は必しも經をよみ文字を書にもよるべからず。唯一心の源をみがきて、其上には隨分罪業をおそれ、三寶の大恩を報したまふことと心要に候。世智と申て、或は外典に達し、或は武道に達し、又は歌道其外諸道にかしこくまします人なりと云とも、佛法は師傳口業をうけずして自力にてはなりがたく候。但世智を以て法智をしると云事、又は佛祖不傳などゝ申ことは、別之(ベツノ)子細ありげに候。涅槃經に曰。實智惠者(ジツノ…ハ)則是度(レワタル)老病死海(ヲ)堅牢船(ケンラウノフネ)也。無明黑闇(ムミヤウコクアンノ)大明燈(トウ)也。一切病者之(ノ)良藥(ラウヤク)也。と云々。然者世間にかしこくましますばかりにて佛法の智惠なきは權の智と申、永世をねがひ佛法の邪正をわきまゆる、これ實のちゑなるべきこと。勘左衛門殿二人の亡者市右衛門殿六人の亡者慥に過去帳に着置申候。

二月廿三日　　員外嘉休

市右衛門殿
久右衛門殿
貴答

二

久敷絶音問御床敷候所に、九右衛門殿就御上洛兩通之芳翰具に令披見候。先其元御入魂之衆中何も御無事之由珍悦之至に存候。就中九右衛門殿一義御執心に付御懇切之貴札、尙又七左殿御緣類之由、何かに付候而不及辭退、不殘令附屬候。且者於其地各々御內談可有と存故に候條、自餘之御同行中へも其通御傳說可有候。經文にも聞て能持事を本意と說給て候。此故に四種の行人を立て、其內に二人は往生を遂二人は往生不遂と明せり。其四種とは、初佛法を信して後に捨人、初中後不聞不信人、此二人は往生はならず。又初は佛法を疑誹謗せる人も、後に聞得て信ずる行者、又初中後善心にして臨終の砌まてよく信ずる。尤此二人は大往生を遂と釋せり。正信偈と申書に必以信心爲能入と候。涅槃の都には必信を以て能入ると爲となり。

五月十日　臨西叟

深津七兵衛殿

廻答

三

重而は御狀も給間敷候。右惣左衛門殿にも御斷申候。爰元之衆にも參會不仕候。以上。

神田治左衛門殿就御上洛芳墨到來披見不淺存候。其元皆々御無事之由、珍悅之至に候。殊に一道御信心之通感入候。當代は正法破滅之時代にあたり候へは彌々修行成就しがたき時節に候。釋尊御入滅二月十五日、その翌日十六日より五百年は、直說の御弟子等次第に敎化したまふ故に、解脫堅固と云。次の五百年を禪定堅固と云。次の五百年を持戒堅固と云。次の五百年を多聞堅固と云。次の五百年を闘諍堅固と云。合て五々二千五百年なり。此第五番の五百年今の時也。闘諍とはたゝかいあらそふとよむ也。佛法の上におゐて、出家在家あつて正法をすゝむる智者を、外道魔法といひかすめ、國王武家へ訴、あるひは流し、又はころすゆへに、正法はかくれとゝこほるゆへに、闘諍言訟白法隱沒とかれて候。白法とは眞實正法の事也。右は大集月藏經の第九卷の說なり。又法華經五の卷安樂行品に、於後末世。法欲滅時。有受持

法華經者。於在家出家人中。生大慈心。於非菩薩人中。生大悲心。應作是念。と云云。此末世と說たまふも今の時代にあたり候。正像末の三時と云て、これを二月十六日より五百年を正法といひ、次を像法一千年、合て千五百年すきて後を末法萬年と云。されはその末法に法のめつせんときは、在家ともいひ出家ともいはん人の中に、大慈悲の心を持たる人出世あるへし。是を緣ある衆生は念ずべしとなり。此文のおくに此人をは大なるとが人といひてうしなはんと說たまへり。七の卷の藥王品に、後五百歲中と有文も、後の五百歲とは、第五番目の五百歲にも如說に修行せは、於此命終。即往安樂世界。阿彌陀佛大菩薩衆圍遶住處。生蓮華中寶座之上。と說たまへは、釋尊の未來記是今の時の人々にて候ぞ。大切の事に思、信心をこたらせ給な。

法華經の一卷に、

諸佛興出世。　懸遠値遇難。　正使出于世。
說是法復難。　無量無數劫。　聞是法亦難。
能聽是法者。　斯人亦復難。　譬如優曇華。

と說たまへり。此文の心は、諸佛の世に興出したまふこと懸遠にして、あひたてまつることかたし。正使世に出玉ふとも、是法を說たまふこと復かたし。無量無數劫にも是法を聞ことかた

し。能是法を聞もの斯人亦復難。譬ばうどんげのごとしとなり。是皆經文の心にて候。以上。

嵯峨雙軒菴（この肩書七册本にのみあり）
臨西

九月廿日

落合勘左衞門殿
引頭市右衞門殿
妙林尼公
各々貴答

四

前輯に遺存の原本を收錄したから、この遺文集の分は省略する。但しこれは原本のものに比して漢字を交へること多く、又日附は慶安三年霜月廿三日となつてゐて十六日後れ、宛名を缺いてゐる。

遺誡

拾遺

一

涅槃經第六之文也

諸比丘。佛出世難。人身難得。値佛生信。是事亦難。云云。

コノ文ニ佛ノ世ニ出タマフコトカタシト說タマフハ、ホトケハ出世ノ善智識ヲ云也。

一切ノ凡夫森羅萬象ニ佛性アルニ、知識ニカキリテ佛ト云事不審ト云人アルヘシ。尤其イハレアリ。一切萬物ニ具スル所ノ佛ヲハ轉心ノ佛ト云也。イカナレハ轉心ト云ナレハ、三界六道ニ浮沈シ、アルイハソノ業ニヨリ、樣々ノカタチヲウケ、其躰具シテメクル。故ニ轉ノ字ウクルトヨメリ。故ニ仁王經ニハ六道ノ中ニ佛ハ入ト云文下卷ニ見タリ。淨土ニコレヲ己身ノ彌陀ト云。禪宗面目ト云。本分トモ本地ノ風光トモ云。法相宗ニハ唯識唯心トモ云。三論宗ニハ八不ノ中道ト云。花嚴宗ニハ心佛及衆生トモ云。眞言宗ニハ心王大日覺王、天台宗ニハ一心三觀、何モ諸宗ニモツテアソフ名言、是我家ノ空ト云法門ノ一理ナリ。是ヲ覺テモ地獄ニ

ヲツル故ニ、空堂諦觀无相變化六道入无間ト仁王經ニ是アリ。佛ヲタノミテ地獄ニヲツルトハコレナルベシ。亦出世ノ佛ト云ハ、往古ヲトレハ過去七佛、イマヲトレハ當座ノ善知識也。此出世ノ大道師ニ値タテマツリ、空法門ヲ捨、本覺无爲ノ佛躰ヲ覺、此佛躰モ重テ亦三惡ニ更皈ル佛成故ニ、此佛土ヲスキテ大乘ノ沉理ヲ覺、其上一字ノ御法門マテ定了ル時ハ、經論モイラズシテ、今生ノ衣袈裟官位堂塔ノ莊嚴ミナ方便ト成、カヤウノ敎ヲサツケタマフコトヲ、佛ノ世ニ出タマフコトカタシト。此知識ハ生智ナル故ニ、ナラハズシテ一切ノ事ヲ智タマフ。故ニ天台ノ止觀第一ニヒロク引レ敎、辨レ有レ師无レ師。言レ无レ師者。如ニ大論第二云一。我行无ニ師保一。志一無ニ等侶一積ニ一行一得レ佛。自然通ニ其道一。增一第十五云。阿若等五人問レ佛。佛師爲ニ是誰一。佛答云。我亦无ニ師保一。亦復无ニ等侶一。獨等无ニ過者一。已上。涅槃經ニ尚增一阿含ノ文ノ同說タマフ。内典ノ證文ニ一々引ニイトマアラス。外書ニモアリ。論語ニ孔子曰。生而シテ知レ之者ハ上也。學而知レ之者ハ次也。困而學レ之又其次也。困而不レ學ハ民斯ヲ爲レ下ト云。人身ヲ受事、過去ニテ能功德善根ヲシタリシ故ニ、亦セメテハ五戒ヲタモチタ者、今人間ト生、是希成故ニ難ト說タマフ。佛ニアイテ信ヲ生是事亦難トハ、善知識ニアキテ佛法ヲ聽聞スルトハイヘトモ、アルイハウタカイ、或ハヲコタリ捨、眞實ノ行者マレニシテ、

往生ヲ得者マレナルユヘニ、善導ハ千中无一萬不生ト釋シタマフ。故ニ信ヲ生事カタシト文ニアリ。信力第一ノ肝要也。文字ヲシラテ流轉スルトモ、愚痴ニテ往生セヌトモナシ。信心カケヌレハ往生ハセヌ也。コノ故ニ親鸞ノ釋ニ必以信心爲能入トアリ。コレモカナラス信心ヲモツテヨク入ナレハ肝要ナリ。

一當上人御詠歌ニ

當世ノ人ノタウトフ佛法ハ
佛師ト大工繪屋ト薄ヤ

此御歌誠成カナ。今ノ代ハ佛法ノ道理ハワケテ大ナル寺ヲ立、木像ヲスヘ、薄ヲヌリ、エヲカキ、經ノ理ヲシラヌサヘヲカシキニ、アマツサヘフシヲツケ、打ナラシスル。ヲカシキカナ。〱。出家サヘカヤウニ迷タレハ、末々ノ凡夫迷モ道理カナ。〱。來世ハ无間ノスモリナルカ故ニ、傳教大師秀ノ下卷ニ、雖贊法華經還死法華心トノヘタマフ。今ノ世ハ法華經ヲ今生ノ祈ニヨム。大乘沈理大事ヲコロスカナ。〱。案給ヘ。文字バカリヨミテ義理ノ分別ヲシラヌ法師、天台大師止觀ノ五卷ニ、闇證禪師誦文ノ法師ノ佛法シラヌ者ト說タマフ。ヲソラクハ出世ノ道師ニアハテ後生ヲタスカラントヲモハンハ、家ノ内ニテ虎ヲコロサントヲモ

フガゴトシナキ（マヽ）モノナリ。釋迦ノ時代ノ者ハ釋尊ニアイテ往生ヲ定、日蓮ハ其代ノ者ヲミチビキ、今ハ今ノ知識ナリ。能々唯今ノ御教ヲタツトミタマヘ。急々間アラ〱如此。カヤウ〱事八左衛門殿ニ書渡候。其方ニテ御ラン候へ。法華經ノ文ドモ其方ニ候ハンマヽ不書候。カヤウニカキシンシ候事、此度ノ信ヲ定メタマヘト云事ナリ。カマヘテ文ニカヽリテ大事ヲワスレタマフハ、枝ニ花コノミシゲリテ、ヲノレトソノキノカル、ガコトシ。知恵ナクシテ學ヲモトムルモカクノコトシ。

于時慶長十七年七月九日　　空禪ハン

竹長右衛門殿

二

（空源自筆軸物添状）

此一幅者涅槃寺開山及意上人之御眞翰也。慶長第二三月ノコロヨリ水食ノ二事ヲ斷、無言シタマフコト五七日。トキニ弟子檀越來參スルコトアレハ、紙上ニ誌テコレヲシメスコト毎日、予御面前ヲハナレス、讀誦シテ緇素ニ聞ス。其御筆迹師勅トシテ燒拂。然トイヘトモ、或ハ一

日ニ一通、五日ニ一通殘畢。是一幅其内一也。高師ノ芳黒タル故、筥底ニヲサメ、累年頂拜セシムルトイヘトモ、信士武藏ノ國江戸ノ住藤原ノ朝臣岩井善右衛門尉正次、佛道ニ志深、三寶ノ渇仰アサカラサルユヘ、此一幅ヲ讓與。彌々信敬アルヘキモノナリ。

文殊院
クウセン

慶長二十曆大蔟晦

三

（空源自筆軸物添状）

此一幅者師及意上人無言
觀定中書之給畢。

員外之沙門
嘉休

信心堅固之間預置之
所也。經三ヶ年此方可被返者也。

于時寛永第五曆大蔟中四

四

如來證涅槃　永斷於生死
若有至心聽　常得無量樂

寛永五年九月二十四日

涅槃法燈弟子
員外沙門文殊院
空禪（花押）

五

（文殊院開版往生要集刊記）

世間流布之本。依レ繁落字謬點一。令レ尋ニ求往古楞嚴院點本一。開ニ板之一。信ニ師言一。置ニ之座右一。備ニ於廢忘一。可レ爲ニ證明本一而已。

旹寛永八年辛未十月日

洛陽五條坊門上柳町書林

員外沙門嘉休

六

おくかきのよみ

夫妙法蓮華經。諸經最頂。衆典奧藏。醍醐極味也。殊普門品。無レ有ニ闕滯一世願望祈一。藥王品者。別而女人得道。後五百歲有ニ誓約一。賴哉。酬ニ具一切功德佛語一。皈ニ依一切衆生充滿其願金說一。現生達ニ福壽增長子孫繁榮望一。當來必生ニ蓮華中寶座之上一。

註　右の本文が文殊院の筆、「おくかきのよみ」の七字が春貞尼の筆であることが、箱の表書に見えてゐる。

くれ〴〵主の御まんそく目出度存候。〳〵。以上。

七

たゝ今さかより昨介御下し被成候とて、則貴様御屋敷のぶとう從周榮樣我等方迄迗被下候。御庭前と存、佛前にそなへ、則いたゝき申候。かたしけなく奉存候。懸御目可申上候。

一今度おんまへには御いそかわしきをも歸りみす、諸事をすてゝ持佛堂こんりうのために御上洛被成候。實に佛のいじんちから貴殿心中にこたへ、師恩のほうせん御心指おのつから來る。是偏にわかなす所にあらす。ゆへはいかんとなれは、つみはむしよりなるゝによりてわれしれり。善くわは佛恩出る時にあはすは此心つかさらん。世は皆ざいほうをまたくし子孫につたへん事に、身をついやし命をほろほすに、現在の花も佛法のこのみも御とり候。今末代に至てかやうのこんりうは一世のちからにはよらじ。たふんむかしいかなるくわん力を被立、此義しやうしゆいたし候や。扨もたのもしき御心中かなと御うら山敷候。然者來八月近日に候。持佛堂も出來申候由承申候。御手すき候はゝ、ちと〳〵御上洛可被成候。我等も御膳も出來申候。來八朔にさし上申度候と存事に候。

猶々ぶたう子共内衆にいたゝかしあやからし可申候。以上。

註　箱の表書に「嘉休様御筆良入様へ被進候御文」と見える

八

今此三界　皆是我有
其中衆生　悉是吾子
我亦爲世父救諸苦患者

大日如來

父母所生身則證大覺位
心王大日覺王身
信心施主即心良入信士

雙軒菴員外臨西（花押）

釋迦大聖如來

釋迦如來　久遠成道
皆在衆生　一念心中

不復更爲一切災横鬼虵刀杖毒藥
呪詛怨賊水火之所能害遠離怖
畏獲得安穏臨命終時見十方

大悲觀音

佛往生極樂
具一切功徳慈眼視衆生福聚海無量
是故應頂禮

慶安元戊子稔十二月念日

九

與介にかみゆひとらせ可給候。かみゆいにかねたし候事は、其方はかりなされ候へ。ふたりまては大きに候。

商事候や。不及言候へ共、萬事情に可被入候。

一何に而も、つねのそうばよりやすき物持來候共、根本をしらぬものに候はゝ、少もかい申間敷候。左様之物は盜物と可心得候。

一何たるものにも、一やのやともかし申まし。又あみかさにてもあつかるまましく候。

一人のくちあいせらるるましく候。

一かけあきないせらるるましく候。

一人何やうの事申候共、氣みしかくことはあらく申ましく候。何様重而具に可申候。

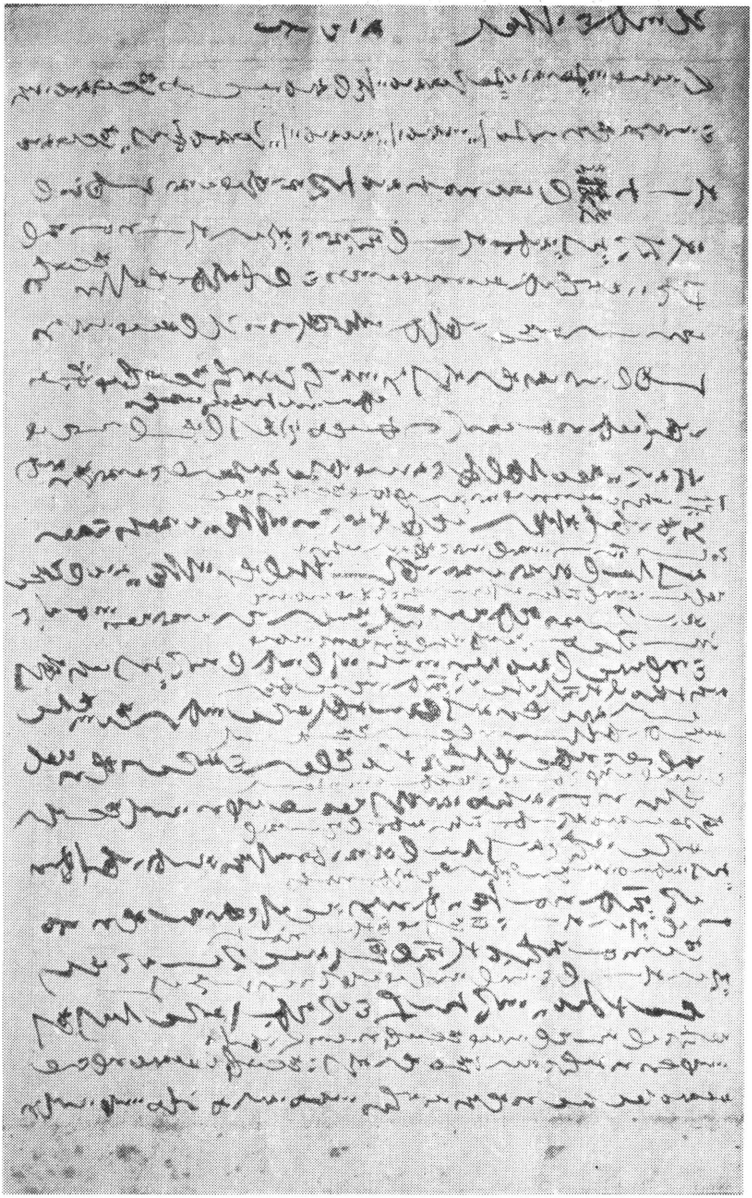
以上

孟春十日　草名（花押）

（ウハ封書）
「封〆　勘十郎殿　臨西」

一〇

五月十七日に、みいてらの御かいちやうへまいり、それより大つの町へさかり、ひかしかはにて、かいづやと申所にやとをとり候へは、長三郎あとよりまいり、これはさんくうのとき里兵へ殿とらせたまふやとにて候と申候。さてもきゑんなる事かなとこゝろおもしろく、そのよはとまり、あくれは十八日、おの〱御まいり候あとなつかしく、さかもとさんわうさまへまいり、みや〱おかみめくり、御ものかたりのさるなとみ候て、三のみやのはいでんにてへんとうひらき、ちやなとたべ、ほう〱らくかきなとみ申候へは、さんくうのときかきたまいしふてのあと、三所に、さかのいほりを出たまふしな〱、かめ介五さいと三所にかきて御さ候。六さいになるくまの介は、さかにるすいたす事は、かきおとさせたまふにやと申、わらい申候。中にも正めんのにしのはしらに一しゆのうた有。あくしんをみされいわされおもわぬに神（かやうに候か。てにはわすれ候。）



文殊院消息

もすゝしくまほりたまへや、春貞と候。いつのまにうたをけいこめされ候や。まことにかみも御のふしゆうあるへくとおもわれ候。天たいでんぎやう大しのつぎはじかく大しと申候。その大し七猿（ゑん・さる）のわかと申て、さる七ひきゑにかき、一しゆつゝの御うたをあそはす。一にみさる、二にきかさる、三にいわさる、四はんにおもわさるのうたに、みずきかずいわさる三つのさるよりもおもわさるこそまさるなりけり、とあそはされ候。みるもきくもいふもみなこゝろをみなもととすれは、とかく萬事あくしんはおもわぬかまさるとの御事なれは、かのはしらのうたにおもわぬとよみ入たまふは、じかく大しの御うたのこゝろにかない候かと、一しほかんし申候。かのじかく大しは日ほんに四大しと申て、でんきやう・こうほう・じかく・ちしやうと申て、やすからさるめいしやうにて候。さやうのちしきの御うたにかない申さは、なとやかみもすゝしくまほらせたまふへしと、たのもしくおほしめし候へ。さて十九日又大つへかへり、かいづやたちより、ゆる〳〵いたし、かへり申候。いかさまふてのあとなとは、みるになつかしきものにて候。さんわうにては御めにかゝるこゝちいたし候。たゝしみきのうたは兩さくにて候か。一作にて候か。まことにきどく千萬におもわれ候なり。

さかより

いつみや御二所へ

二

（文殊院筆佛遺教經奥書）

あつさゆみはつるへしとはおもわねはなき人かずにかねて入かな

かのきしにこきはなれたるあまをふねおしてつくへきうらももたねは

山さとはもの丶さひしきことそある世のうきよりはすみよかりけり

身ひとつは山のをくにもおきぬへしすまぬ心そおきところなし

何をして身のいたつらにをひぬらんとしのおもわんこともはつかし

けふも又くる丶とはかりかねき丶て身のいりあいとしる人そなき

心たにまことのみちにかなひなはいのらすとても神やまほらん

てにむすふ水にうつれる月かけのあるかなきかの世にもすむかな

後記

人の消息といふものは、見るからに懐かしく、讀んでその人に會ふやうな思ひのするものである。それだけに法話や訓諭などが消息文によつて記される場合は、堅苦しい著述とは異なり、おのづから柔か味があつて、いかにも親しみ易い。蓮如上人が消息の文を作つて布教の用に當て顯著な効果を收めたといふのは、さもあるべきことである。その意味に於て、文殊院の消息文も亦注目すべきものであらう。そこには文殊院の人と爲りがさまざまの姿で流露し、目のあたり相對するかのやうな親愛感をいだかせる。

涅槃宗の教旨を窺はうとすれば、勿論開祖空源の著述を見るのが第一である。その著述としては、いづれも短篇ながら、今日約五十種のものが傳へられてゐる。しかしそれはかなり難解で、それだけでは或は誤解の生ずる恐れもないではない。この點高弟たる文殊院の遺文を併せ見ることによつて、始めて涅槃宗全體の妥當な理解が得られることになるであらう。

文殊院については、第貳輯に相當詳細に論述したが、それでも全體としては尙說き足らぬところが殘されてゐる。前輯と本輯の解題は即ちその補說の意味を兼ねるものである。

昭和二十七年八月

編者識

昭和二十七年八月　初版発行
昭和六十一年七月二十五日　初版第二刷発行

658 神戸市東灘区住吉本町三丁目四番二四号
編纂発行　住友修史室

601 京都市南区唐橋門脇町二八
印刷　河北印刷株式会社